

絆

R e e

月明かりが川面に揺らいでいる。

空には雲もなく、満点の星が輝いていた。

宇門源蔵は、分厚いデータファイルからまた細かくデータ分析するため書斎のデスクに向かっていた。が、ふと鳥の鳴き声に手を止め、小さくため息をつきお気に入りのパイプに手を伸ばした。

カチツ

パイプに火を付け、立ち上がり、惹きつけられるように窓の外の景色を眺めていた。

「静かだな……こんな日は気持ちしが和らぐ……」
しばし煙を揺らめかせていた。

コンコン…… ガチャ!

「父さん、コーヒーでもどうですか? 一緒に飲むうと思つて……」

息子の大介がトレーにマグカップを二つ乗せて入ってきた。

「ああ、ありがとう。今一息入れていたところだよ」
大介はマグカップを父にわたし、自分もカップを手に取り二人並んで窓の外を眺めた。

「静かですねえ。こんな日はなんだか心が落ち着きますね」

「ああ、そうだな……きれいな星空だ……」

自分と同じ想いを抱いた事が、よけい宇門の心を和ませた。

いつもどうしてわかるのだろうか。タイミング良く彼はこの部屋に入ってくる。

そしてその仕草や言動は、いつも宇門の心を和ませた。

多分それだけ自分に気を配ってくれているのだろう。それは彼の所員に対する態度から見てもわかる。

過ぎた息子……と、宇門は目を細めながらコーヒーを口に運んだ。

息子と呼ぶようになってかれこれ3年ほどになる。今では本当の親子のようだと思っているが、果たして彼はどう思っているのだろうか?

大介は、多くは語らない。無口では無いのだが自分の事は進んで話さない。いや話せないのかもしれないと思うと、時折不憚にも思えた。

宇門はまたパイプをくわえ、軽く目を伏せた。

「今日、吾郎君が小さい子犬を拾ってきましてねえ」
しばらくの沈黙の後、宇門の心を知ってか知らずか、大介が話しはじめた。

「ほお……子犬をねえ」

「僕が母親になるんだって、張り切ってましたよ」

「そしたら団兵衛おじさんがいきなり怒って……」

「バツカモン！ お前は牧葉家の長男だー！

なるんなら父親だろうがー！ って」

「なんだか変なところでムキになっちゃって、またいつも通り喧嘩ですよ……」

「ははは！ 団さんらしいね」

「おじさんは、まだちっちゃい子犬に、お前は立派な牧羊犬になるんだぞって言い聞かせてるし……吾郎君は、この子は女の子なんですから大人しいかわいいレディに育てるんです。お姉ちゃんみたいにお転婆になつたらどうするんですか？ って……」

「あははは！」 宇門は声をあげて笑った。

「それを聞いてひかるさんがまた怒り出して…… 三人でまた大喧嘩ですよ。全く……」

「あははは！ あの親子らしいな」

「ええ全く…… いい親子ですよ」

二人は笑いながら会話を楽しんでいった。

リリーン リリーン

遮るように電話が鳴った。

宇門はマグカップをデスクに置き、せっかくの楽しいひとときなのにと迷惑そうな顔で、夜も遅い電話に手をかけた。

「はい、宇門です」

「え？ あ……ああ……平井？ 平井君かね……久しぶりじゃないか。懐かしいねえ。どうしていたかね？」

どうやら電話の相手は昔の宇門の知り合いのようだった。

「元気でやっているかね？ ああ……うん……、ほお……」

そこまで聞くと大介は空いたマグカップをトレイに乗せて黙って部屋を出ていった。

朝……白樺牧場はあわただしい朝の仕事が始まっていた。

ひかるは、山羊の乳搾りをしており、その傍らで吾郎がちっちゃい子犬を抱きながら、

「お姉ちゃん、この子お腹空いてるんだからさあ、早くしてよお」

「わかったわよ。ほおらどうぞ」

ひかるは小さいボールに搾り立てのミルクを入れてやつた。

「美味しいかい？　　いっぱい飲んで大きくなるんだよ」

吾郎はミルクを一生懸命飲んでいる子犬の頭をなでてやつた。

大介は搾り立ての牛乳のボトルを荷車に積んでいった。

「大介さん、みてー。この子いっぱいミルク飲んだよ。きつと大きくなって美人さんになるよね」

と、吾郎は大はしゃぎしている。

「うん。吾郎母さんがついてるんだから、きつとかわいいレディになるよ。ひかるさんみたいにね」

と、吾郎にウインクして見せた。

「まー大介さんたら、お世辞言つても何もでませんからねー！」

ひかるはぶいつとふくれつ面をして見せた。

大介は首をすくめ、やれやれ……と笑つた。

3人の笑い声が朝の柔らかな日差しの中に響いていった。

朝の一仕事が終わる頃ジープで甲児がやつてきた。

「おはよー！　みんな早いねえ」

腕をうーんと伸ばしてあくびをしながら歩いてきた。

「甲児君、おはよう。仕事手伝つてくれるつもりだったのならもう終わつたわよ」

少し嫌みそうにひかるが言つた。

「ちえっ！　　ひかるさんにはかなわねえや……」

大きなバケツを提げているひかるに近づき、代わりに持つてやつた。

「ありがとう、さすが甲児君ね。じゃこれもお願い」
ともう一つのバケツを渡した。

「はいはい……お手伝いいたしますと……」

あははは！　二人は連れだつて馬小屋に入つていった。

馬小屋では大介が干し草の整理や片づけをやつていた。

「大介さん　おはよー」

甲児がバケツを二つ提げて入つてきた。

「甲児君、おはよう。あれ？　手伝つてくれるのかい？　感心感心♪」

大介は大きな鍬で干し草をほぐしながら言つた。

「いきなり嫌み言われちゃあ、手伝わないとねえ……」

甲児はバケツを馬小屋に置き、頭をぼりぼりと掻いた。

「あつそうだ、大介さん。ちよつと聞きたいことがあるんだ」

「え？」

「新しい俺の円盤の事なんだけどさ、ちよつと行き詰まつちやつて……ちよつと設計図見てもらえないかなあ？」

「え？ 甲児君。また新しい円盤を考えているのかい？」

「何とかサイクロン砲を効率よく動かしたくてさ。今度は凄いの考えてるんだ。だからさあちよつと見てもらえないかなって……」

「わかった。でも今は忙しいから、昼からでもいいなら研究所の方に行くよ」

「オッケー！ じゃ俺今からまた設計図引いてくるよ。なんだか燃えてきたぞー」

甲児はガッツポーズをした。

「あはは！ 甲児君はいつも前向きだねー」

「じゃ 後でな！」

甲児はそこまで言うのと馬小屋から走り出してジープに乗って行ってしまった。

「ちよつと甲児くん！」

ひかるが慌てて呼び止めようとしたが、甲児は走り去ってしまった。

「なによ！ 手伝わてくれるんじゃないの？ もう！」

「あはは！ 甲児君は今新しい円盤の事で頭がいっぱいらしいよ」

「甲児君らしいわね。走り出したら止まんないんだから」

あはは と二人は笑いながら仕事を続けた。

昼少しを回った頃、大介はデュークバギーで研究所に向い、玄関に横付けすると観測室に向かった。

キューーン

自動ドアが開くと、所員達が雑談をしていた。

「あれ？ 父さんは？」

「あつ大介君。所長は今来客中なんですよ。応接室にいます」

背の高い山田所員が説明した。

「来客？」

「それがね、とびつきりの美人さんなんですよー。あの人、絶対独身ですよ。だって指輪してなかったもんな」

林所員が説明する。

「おつ！ 林君、観察が鋭いねえ。きつと大和撫子っ

てああいう人を言うんだろうなあ。奥ゆかしくて、品があつて……」

佐伯所員が続けて羨ましそうにしゃべった。

「へえ、珍しいね。父さんに女性の客つて」

「所長もまんざらでもなかつたなあ……あはは」と山田所員。

「あの人だったら誰でも鼻の下伸ばしちやいますよー」と林所員。

「林さん、その話、彼女には内緒にしときますね」と大介。

「いや、こりやまいつたな。あはは！」

林は頭を掻きながら照れ笑いをした。

「じゃ、僕、甲児君と設計室にいますから……」

「(お客さんに)会わないんですか？ 勿体ない……」

「おじやま虫は、いない方が良いでしょう？ ははは！」

と笑いながら大介は観測室から出ていった。

設計室に向かう途中、大介は昨日の電話を思い出していた。

多分昨日の電話はそういう事なのだろうと納得していた。

大介は息子になって約3年。

父の昔の知り合いは自分の存在を知らない。本当

の事を説明する事は出来ない。自分を紹介する度、困惑する知人や父の態度を見るには忍びなかつた。だからなるべく昔の知り合いには会わないようにしていた。まして女性ならば尚のこと、なるべく自分の存在を知らせない方が良いでしょうと大介は足早に設計室に向かつた。

コンコン……カチツ！

設計室のドアを開けると、散乱した図面と腕組みをしてドラフターの前に座り込んでいる甲児がいた。

「へえ？ 凄い図面の量だね。甲児君一人で書いてるのかい？」

「ああ 大介さん。コンピュータで図面起こすのもいいんだけど、俺、手書きの方が性にあつてさ……」

「そりや甲児君らしいねえ」

散乱している図面を取り上げ、大介はまじまじと眺めていた。

「この詳細図、よく書けてるよ。これが手書きとは、驚いたなあ……」

「図面が書いてもそれが動かなきや意味が無いんだ！俺は早く大介さんの片腕になりたいんだ！」

「ありがとう、甲児君。でも無茶はしないでくれよ」

「無茶は俺の十八番だからね。いい加減大介さんもあ

きらめてくれよ」

「あはは！ 強い味方だ」

「でさあ、ここをちよつと見てくれないか？」

甲児はドラフターに挟んである図面を指さし、説明をはじめた。

大介も図面を覗き込み、

「ふん・ふん……」

「ここにサイクロン砲を取り付けて、その横に光子力ビームも取り付けたいんだ。そうなるとスペースの問題が出てくる。ここをどうやって確保すればいいのか……」

甲児は頭を抱えた。

「うくん、このスペースの確保は難しいな……うくん……」

「これをここに移動すれば……」

大介は図面を指さし話を続けた。

「大介さん、そうするとさあ、また今度はエンジンの出力の問題が出てくるんだ」

「ああ、そうだな…… じゃこうすれば……いやそれもまずいな……」

「俺、こうすればどうかって、考えてるんだけど……」

「うくん、そうできればいいんだが……」

二人は設計図を前にしてああでもない、こうでもない

いと議論していた。

二人がふうつとため息をついた頃には夕方になっていた。

「お？ もうこんな時間だ。甲児君すまん、牧場の仕事を残していたんだ。続きは今晚ということではないかな？」

と大介は腕時計に目をやり、甲児に説明した。

「もうそんな時間かあ…… オツケー、続きは夜にしようぜ。俺も少し外の空気を吸ってくるよ。」

大介は、じゃ！ と片手をあげ設計室を後にし、慌てて外へ飛び出し、バギーで白樺牧場に向かった。

（ん？ 大介……こつちに来てたのか……また牧場に向かったな？）

応接室の窓からパイプをくわえ外を眺めていた宇門は、慌てて走り去る大介を窓から見送った。

「先生のパイプの匂い……懐かしいわ。今でも同じ銘柄なんですね。あのころを思い出しますわ……」

応接室のソファには30半ばのきれいな女性が座っていた。

優しい面もちで、線が細く、髪の毛は緩いウェーブがかかっており肩まで伸びていた。

「そうだね。あのころからずーっと同じ銘柄だからねえ」

「夕子君、今日は実に楽しかったよ。わしも久しぶりに若返った気持ちだよ」

「いえ。先生はいつまでもお若いですわ」

夕子と呼ばれるその女性は、くすつとはにかんだように笑った。

「あの、研究所は案内してもらえませんか？」

「いや、すまんね。研究所は部外者の立ち入り禁止なんですよ。一般の方はここまでということ……」

「そうなんですか…… 先生のお仕事を拝見したかったのですが……残念ですね」

夕子は憮く笑った。

「先生はこちらの研究所にお住まいなのですか？」

「いや、同じ敷地内に居宅を構えてるんだが……」

「じゃ、そちらにおじゃましてもよろしいかしら？」

「男所帯のむぎ苦しいところです。そんなところによければ……」

「嬉しい……今晩泊めていただけますか？」

夕子はすがりつくような目で宇門を見つめた。

宇門は少しびびりしたが、

「私は仕事がありますので、あまりおかまいできませんが、それでよろしければどうぞ」

「ありがとうございます」

夕子は少女の様に微笑んだ。

宇門は、では車を回してきましよう。と言つて、夕子を伴つて応接室を後にした。

宇門邸は華やかさは無いものの、しっかりとした造りで、周りの景色に溶け込んで落ち着きを見せていた。

宇門は、玄関を開けて夕子を招き入れた。

「さあ、どうぞ」

夕子は辺りを見回しながらも、宇門のエスコートに心を躍らせていた。

宇門は夕子をリビングに案内した。

宇門邸のリビングは20畳ほどの大広間だ。窓はフルオープンでウッドデッキへと続いている。窓を開け放つと、少しひんやりとした外の風が心地よく入ってきた。

チツチツチツ…… 小鳥のさえずりが聞こえる。

「ああ、なんて素敵なおところなんでしょう♪ そう言えば、以前、兄と一緒に天体観測所に連れて行つていただきましたね。あの時もこんな心地よい風が吹いて、私なんて素敵なおところなんだろうって大はしゃぎしてましたわ」

夕子は、長い髪の毛を風になびかせながら、ウッドデッキの手すりにもたれかけ懐かしそうに微笑んだ。

「ははは、そんな事もあったかね？ 風が気持ちいいでしょう。ここは私のお気に入り場所なんですよ」

「夜には息子も帰ってきます。三人で一緒に食事でもしましょう」

「え？」

夕子の顔色が一瞬変わった。

「息子さんがいらつしやるのですか？」

「さつき研究所に来ていた様なんだが、また牧場の方に行つてしまったようで……」

宇門は、嬉しそうに息子の話をしていた。

夕子はじつと下を向き、手すりを持つている手がわなわなしていた。

宇門が話しかけていたが、彼女の耳には届いていなかった。

「夕子君？」

「え？ あつ？ はい？」

夕子はびつくりしながら振り返った。

「部屋に案内するよ。荷物はそちらに置きたまえ」

「あつ……はい……」

夕子はもうこれ以上長居する気はおきなかったが、自分から泊めて欲しいと言いだした手前渋々ついていくしかなかった。

廊下を歩いていく途中あたりを見回したが、女性が一緒にいるような気配は無かった。

（息子さんがいても奥さんがいる感じじゃ無いわね。男所帯つて言つてたし……決心して出てきたんだもの……このままでは帰れないわ）

夕子はとぼとぼと宇門の後ろをついていたが、やがて顔を上げ、決意した様に歩き出した。

2階のゲストルームに荷物を置き、軽く身支度を整え、用意してあったエプロンを持ってダイニングルームへと向かった。

ダイニングルームに続くキッチンでは、宇門が、さでどうしたものかと悩んでいた。

「あの、先生……夕飯の準備お手伝いしますわ」

「おお？ そうかね。食材は切らさないようにしてあるんだが、実は料理は苦手だね。大抵研究所で食事をとっているし、家に居るときは大介が作るんだが……」

そういいながら調理スペースを彼女に譲った。

「昔からそうでしたわね。アパートメントに何うといつても店屋物ばかりで……」

「そうだったかね？ そういえば君はお兄さんの平井君と一緒によく遊びに来ていたね。そう確かシチューを作ってくれたことがあったなあ。君のシ

「チューは美味しかったよ」

「まあ覚えていてくださったのですか？　うれしいですわ」

夕子は宇門が自分の事を忘れずにいてくれたのだと思うと嬉しくてたまらなかつた。

「兄は、なんだかんだと先生のアパートメントにお伺いするものだから、私も一緒に連れて行って！　て兄に無理矢理頼み込んだんです。あの頃は本当に楽しかったわあ」

「今日は時間が無いからシチューは無理ですけど何とか頑張ってみます」

「うむ、すまんね。客人にそんなことをさせてしまつて……」

「ご遠慮なく。料理は得意なんですから」

夕子はとびっきりの少女の様な笑顔で宇門に向けた。

「おおそうだ、大介に電話しておこう。早く帰つてくるようにね」

ぴくっ！　と彼女の手が止まった。

「いや自慢の息子でね。歳は君の方が近いしね。話も合うと思うよ」

と言いながらダイニングルームを出てリビングルームに向かつた。

（自慢の息子……先生はいつご結婚を？）と聞きたかつたが言葉に出せないでいた。一番聞きたくない言葉だつた。

しばらくして宇門が戻ってきて、

「では申し訳ないんだが、少し研究所の方に仕事を残してきているのですね。料理が出来上がる頃戻つてくるよ」

宇門は夕子に微笑みながらダイニングルームを後にした。

白樺牧場では、大介と団兵衛が牛を牛舎に入れるため馬で追い立てていた。

「はーっ！」

「そおれーそれぞれーっ」

牛が大人しく牛舎に入ったとき、ひかるが大声で叫びながらやつてきた。

「大介さん！　おじさまが今日は早く自宅の方に帰つて来るようにつてー！　さつき電話があつたわよー！」

「え？　父さんが？　なんだろ？」

牛舎の片づけをしながら大介が言った。

ひかるが側にやつてきて、

「もうここは私がやるから、先に帰って」

と言って、ひかるは牛たちのブラッシングをはじめた。

大介は心当たりがあつた。きつと林さん達が話していた女性の事と関係あるんだろう。

そう思うと憂鬱になつた。

「いや きつと大した用事じゃないよ。急ぎなら緊急コールが入るだろうし……それにひかるさん一人じゃ大変だしね」

そう言つて大介も牛たちのブラッシングをはじめた。

「え？ でも おじさまに悪いわ？」

ひかるは腑に落ちなかつた。なんだか大介が帰りたくない様に見えた。だが大介と一緒に仕事ができるのが嬉しくてあまりしつこく言わなかつた。

「さつさと済まして帰るさ」

そういつて大介は牛たちのブラッシングを続けていた。

「ふう〜 やつと終わつたわね」

ひかるは額の汗を拭いながらため息をついた。

「大介さん、もう遅いわよ。早く帰つた方がいいわ」
バケツやブラシを片づけようとしている大介の荷

物を取り上げてそういつた。

「ああ、そうだな。そろそろ帰るよ」

大介はお先にといつてバギーに乗つて帰つた。

宇門宅では、珍しくあちらこちらの明かりが煌々と輝いていた。

「確かあのころ君は、まだ大学生になつたばかりだったかな？ お兄さんの平井君が在籍してる大学院の方に忍び込んでただろう」

「あら、覚えてらつしやいました？ 兄に、どうし

もつてお願いして、一緒に先生の講義を受けさせてもらつてたんです。先生の講義は本当に楽しかつたですわ」

ダイニングテーブルにはたくさんの料理が並んでいた。

正面の席には宇門が座り、斜め横に夕子がエプロン姿で座つて、二人は懐かしい思ひ出話に花を咲かせていた。

「うん。いやなかなか相変わらず料理が上手ですな。あの食材からこれだけの物ができるんだからねえ」

宇門は久しぶりに家庭の味を味わつた気がして上機嫌だつた。

「しかし、大介のヤツ遅いな。早く帰るように伝言を頼んだんだが……」

夕子は黙り込んでしまった。

キイー

大介はバギーを玄関に止め、家を見上げた。

普段は物静かな建物も、あつちこつち明かりが点いていて今日は楽しそうに見えた。

(……仕方がない……覚悟して行くか……)

ふう。ため息をつきながら、大介は玄関に入っていた。

「お？ やつと帰ってきたようだな」

(え?) 夕子の心臓は飛び跳ねた。

宇門は席を立ち上がりダイニングルームの扉を開けた。

「大介、遅いぞ！ 早く帰るようにひかる君に伝言を頼んだんだがな」

玄関から歩いてくる大介に向かってそういった。

「すみません……父さん。どうしてもやってしまいました。仕事があつたので……」

大介は頭を掻きながら努めて明るく話した。

ダイニングルームに入るとテーブルにエプロン姿

のきれいな女性が座っていた。

その姿はまさしく父と夫婦であるかのように見えた。

一瞬目が合ったが、彼女はうつむいてしまった。

「夕子君、紹介しよう。息子の大介だよ」

宇門は大介の背中を押し、テーブルに着かせた。

「すみません、遅くなりまして……初めまして、大介です」

夕子は顔を上げ、初めてみる息子にドキドキしながら、初めましてと挨拶をした。

(こんなに大きな息子さんがいらつしやるなんて……)

夕子は何を話したらいいのか言葉が見つからなかった。

「彼女はわしの教え子の平井君の妹さんなんだよ」

「もう15年ほど前になるかな……少しの間だけ大学院の講師を頼まれたことがあつてね。そのときの学生が平井君なんだ」

宇門は当時の事を懐かしそうに思い浮かべ説明した。

「へえ そうなんですか」

「昨日電話があつただろう。平井君からの電話だったんだが、夕子君が今日、急に遊びに来ることになつ

て、昔話に花を咲かせていたら遅くなってしまったね。結局今日はここに泊まって行くことになったんだよ」

「この料理は彼女が作ってくれたんだよ。凄いだろ。わしやお前では絶対無理だからな」

「あははは！ 僕はともかく、父さんは全くじゃないですかあ。しかし凄いですね、こんな料理ができるんだ。じゃ、いただきます」

大介は箸をとり、テーブルに並んである料理を食べはじめた。

「うん、美味しい。夕子さんは料理が上手なんです」
大介に誉められて夕子はありがとうと笑った。

宇門は、夕子に牧場の事やそこで働いている大介の事をあれこれと話していた。

夕子は宇門の顔を見ながら楽しそうに微笑んでいた。

宇門も女性を前にしているせいか、いつもより饒舌だった。

「それはそうと大介、今日昼間、研究所に居たんだね」

「ああ……いや甲兎君に設計図を見られてくれて頼まれてね。一緒に設計室でああでもないこうでもないって……」

「あつ！ しまった」

大介は急に大きな声をあげた。

「びくっ！ 夕子がびっくりして手を止めた。」

「あつ！ すみません……」

「急にどうしたんだ、大介？」

「いや、すみません……甲兎君と約束していたのをすっかり忘れてました」

「とって大介は席を立った。」

「夕子さん、ごちそうさまでした」

と夕子に一礼して、

「父さん、せつかくのところ申し訳ないんですが、ちよつと研究所の方に行つてきます」

と、宇門にも一言言つて大介は足早にダイニングルームを出ていった。

「忙しいヤツだな。少しは夕子君と話をすればいいものを……きつと美人の夕子君を前にして照れてるんだろう……あはは！」

宇門は声をあげて笑った。

「まつ先生つたら、いやだわ……ふふふ」

宇門につられて夕子も声をあげて笑った。

「さてと、夕子君。申し訳ないんだが、今日どうしてもやってしまいたいことがあつてね。ちよつと書齋で仕事をしたんだが……」

「ええ、どうぞお仕事してくださいませ。私はゆつく

りさせていただきますわ」

と夕子は微笑み、テーブルの上を片づけはじめた。

研究所に向かいながら、大介はため息をついていた。

（ふう……きれいな人だったな……父さんもまんざらでもない顔してたし……それにしても夕子さんは……多分そうなんだろうな……僕を見てびつくりしてたし……やつぱり僕はまずいだろう……）

大介は、夕子にとつて自分の存在がどれほど嫌な存在なのかわかるような気がした。

（ここは甲児君に感謝だな……）

と思いながらバギーのアクセルをふかした。

コンコン！……ガチャ！

「ごめん、甲児君。遅くなってしまつて……あれ？

甲児君どこへ行つたんだろ？」

設計室に甲児は居なかった。明かりがついていて、相変わらず設計図は散乱していた。

（仕方がない。ここで待つとしよう……）

大介はドラフターの前に座り、甲児が引いている図面を眺めていた。

ダダダダー！

誰かが走つて来た。

ガチャッ！

息せき切つて甲児が駆け込んできた。

「あれ？ 大介さん。来てたんだー」

誰もいないと思つていたのに、大介が居てびつくりしていた。

「ごめん、ごめん。遅くなつちやつて……」

大介は甲児にそう言つたが、

「大介さん、見てくれよ。もう一度フォームからやり直したんだ。そしたらうまくいくようになつて……」

甲児は捲し立てるように続けてしゃべつた。

「そうなるともう図面引いてるところじゃなくて、実際にシミュレーションしてみたくなつちやつてさ」

「へえー？」

大介はあつげにとられていた。

「今さ、佐伯さんに手伝つてもらつてコンピュータでシミュレーションパーツを作つてもらつてるんだ。佐伯さんつてすげーよ。俺だつたらあんなにうまくコンピュータ操作出来ないもんな」

「そりゃコンピュータに関しては佐伯さんの右に出る者はいないからね」

大介は、佐伯所員が嵐のようにタイピングしている姿を想像した。

甲児は散乱してある図面を拾い上げ、東にして部屋を出ていこうとしていた。

「あれ？ 大介さん、なんか用事？」

甲児はきよとんとした顔をした。

「え？……いや……」

甲児は約束したことをすっかり忘れているらしい。

「じゃ！」

甲児は片手をあげて走り去っていった。

走り出している甲児君に何を言っても、もう声は届かないだろう。

あえて大介は何も言わなかった。

(ははは！ 甲児君らしいな……)

する事がなくなってしまう大介は、仕方なく観測室へ向かった。

今日の当直は林所員だった。

「林さん、何か異常はありませんか？」

大介は林に言葉をかけた。

「ああ……大介君。今のところ静かだよ。ありがたい事だがね」

リーダーシステムを覗き込み林は応えた。

「本当に静かですね……」

メインスクリーンを眺めながら大介が話した。
カタカタカタ……

メインコンピュータから定期的に送られてくる観測データを、林は分析しはじめた。

「大介君、何か用事でも？」

データをしながら林は大介を振り返った。

「いや、何もありません……じゃ！ 大変でしょうがよろしく願います」

大介は林に一礼して観測室を後にした。

宇門邸に帰った大介は、玄関まで来ていながら躊躇していた。

(星がきれいだ……散歩でもしてこよう……)

大介はバギーを停め、川面に向かって歩き出した。
川縁に寝ころび、大介は満天の星を眺めていた。

(きれいだ……)

星を眺めているとフリード星の事が思い浮かんできた。

今は亡き父や母……友人だった人たちの顔が星空に浮かんで消えていった。

そして最後に浮かんできたのは、高らかに笑い声をあげたベガ大王の顔だった。

「バサバサバサー鳥たちが一斉に飛んでいった。はっ！ 大介は飛び起きた。」

「うっ！……うう……」

急に、右腕が痛み出した。

（……負けるものか……絶対に……負けるものか……）

大介は、右腕を左手で強く握りそのまま倒れ込んでいた。

しばらくしてやっと腕の痛みが和らいできた。

よろよろと立ち上がり、大介は自宅へと向かった。

カッ……チッ……

大介はなるべく音を立てないように慎重に玄関の扉を開けた。

足音を立てないようにそつと歩き、バスルームへ向かった。

（冷やせば少しは痛みが治まるだろう……）

そう思い、冷たいシャワーを右腕に浴びせ続けた。10分もそうしていると、腕の感覚がなくなり痛みも消えていった。

ふう……

右腕をなるべく動かさないようにしながらスエツ

トを着込み、何回か深呼吸してからドアを開けた。

「ぎゃー！」

突然夕子の声が出た。

扉のすぐ横に夕子が立っていたのだ。

「あつ！ すみません……」

大介は面食らった。まさか夕子がそこにいるとは思っていなかったのだ。

「いえ……こ・こちらこそ……ごめんなさい……」

と夕子は目線を下に向け、大介に謝った。

「お風呂いただこうと思って……」

夕子は大介の顔を見ず、はにかんでいた。

「驚かせてしまつてすみません。お先に失礼しました」

大介はぺこんと頭を下げ、ではおやすみなさいと声をかけ歩き出した。

「あつ……あの……大介さん……」

はい？ と2階に上がる階段に足をあげようとしていた大介が振り返った。

夕子は下を向いてもじもじしていた。

大介は夕子の真意を測りかねた。

「何か……？」

夕子は顔を少し赤らめて言い出しづらい様だった。

しばしの沈黙の後、あえて大介から話を振った。

「父は書齋ですか？」

「ええ……書齋に入ったきりなだけで……」

夕子はどうしていいものか迷っているようだった。「多分そろそろ一息入れる時間ですね。よければコーヒーでも持っていてただけませんか？ 父も喜びますよ」

大介がそう言うと、夕子の顔がぱつと明るくなった。

わかりやすい人だ……と大介は思った。

彼女の真つ直ぐな想いが大介の心臓をちくちくと突き刺していた。

じゃつおやすみなさいと頭を下げて、大介は足早に自室に向かつていった。

なるべく夕子の側には居たくなかった。

自室に入り、ベッドに座ってまたため息をついた。右腕がまたキリリと痛み出した。

（早く寝てしまおう……そうすれば痛みを忘れる……）

大介は右腕を左手で強く握りしめ、右側を下にして眠りについた。

夢の中で大介は自分が地獄に堕ちてゆくのを見た。

（……う……う……）

目が覚めると右腕の激痛が脳天まで走り、また気が

遠くなる。

何度も何度も同じ夢にうなされ、目が覚めると激痛が走り、気が遠くなっていた。

チチチ……

小鳥のさえずる声が聞こえた。

カーテンの隙間から朝の日差しが差し込んでくる。

（……ん……もう朝か……）

大介は起きあがろうとしたが、体がだるい……

（う……）

腕の痛みは何とか治まっていたが、しびれて感覚がなく、かろうじて指先が動くだけだった。

（まずいな……またドクターの世話になるか……）

コトン。ゲストルームのドアが開く音がした。

（夕子さんが起きたらしい……）

ふらつきながらも体を起こし、大丈夫だ……と自分に言い聞かせ立ち上がった。

動かぬ右腕をかばいながらも服を着替え、そつとドアを開けた。

パタン……

ダイニングルームの扉が閉まる音がした。

大介は気づかれないように静かにそつと廊下を

歩き、表へ出た。

バヒューン バヒューン

車のエンジン音に気がつき、夕子は外を眺めた。大介がバギーで走っていくのが見えた。

(もう出かけるのね……挨拶もなしに?)

夕子はそう思いながらも朝食の準備をしていた。カチャ

宇門がワイシャツにノーネクタイで入ってきた。

「おはよう、夕子君。お? いい匂いだね」

「あつ先生、おはようございます」

「すまんね。客人にそんなことをさせてしまつて」

そう言いながらも、ダイニングテーブルの中央に座つた。

「ちよつと待つてくださいいね、今準備しますから」

「いつて夕子はいそいそと支度を続けた。」

「かまわんよ、慌てなくても……」

「いつて宇門はテーブルに置いてあつた新聞を広げた。」

「あつ……あの……先ほど大介さんが出かけた様なんですが……」

「と、宇門に問いかけてみた。」

「ああ……多分牧場に行つたんだろう。牧場は朝が早

いからね」

宇門は新聞から目を離さずにそう応えた。

「そうなんですか……」

夕子はなんだか変な気分だった。

食事が終わつて、さてと……と言いながら宇門は立ち上がった。

「わしは研究所の方に行きますから……そうだ、一度

牧場の方に行つてみてはいかががですか?」

「後で大介に迎えに来させましょう」

そう夕子に話し、夕子は、ええ……そうですね。と微笑んだ。

宇門が研究所に着くと、玄関脇にバギーが置いてあつた。

「ん? 大介は、牧場に行つたんじゃないのか?」

また甲児君に付き合っているんだろうと思つた。

ウイーン

観測室に入ると、山田所員と佐伯所員が朝のデータ

チェックをしていた。

「おはよう。みんな早いね」

二人が振り返り、

「おはようございます、所長」

と元気よく挨拶した。

「問題はいいかね？」

「はい。今のところ異常はありません」

と、佐伯所員が応えた。

「大介がこっちへ来ていようなんだが……また甲児君と一緒にのかね？」

宇門は所員達に聞いてみた。

「いえ？ まだ姿を見てませんよ？ それに甲児君は今仮眠室で爆睡中ですよ。いやあもう昨日は付き

合わされちゃって大変でしたよ」

佐伯所員は、頭に手を乗せて、笑いながら話した。

「大介も一緒だったのかね？」

「いえ？ 私と甲児君の二人だけでしたよ？」

きよとんとした顔で佐伯所員は応えた。

おかしいな？ と宇門は怪訝な顔をした。

プッププツ

内線電話のコールが鳴った。

「はい、観測室。……はい……わかりました」

山田所員が電話の応対に出た。

「所長、診療室からですが、ちよつと来て欲しいそうです」

ああ……わかった。そう言って、所員にあれこれ指示を出してから、診療室に向かった。

ウィーン

宇門が診療室に入ると、デスクにドクターが座っていた。

「ドクター、何かあったのですか？」

「いやすみません、お呼び立てして」

ドクターの様子が少しおかしかった。

「いえ、実は朝早くから大介君がやってきましてね」
え？ 宇門の顔つきが変わった。

「腕が動かないと言つて、治療をお願いしますつて……今そちらの部屋で眠ってるんですがね」

びつくりした宇門は、ガラスのスクリーンで仕切られた奥の部屋を覗いた。

右腕には包帯が巻かれ、点滴を受けて寝ている大介がいた。

宇門はスクリーンの扉を開けて大介の側に行き、彼の顔をのぞき込んだ。

疲れているような顔だったが、落ち着いたのか呼吸も安定し静かに眠っていた。

（自宅と一緒にいたのに、なぜわしに言わなかった

ののだ?)

宇門はなぜだ? とつぶやいた。

大介を起こさないようにそつとスクリーンの扉を開め、ドクターからカルテを受け取った。

「実は、ここ最近、治療器による治療が頻繁になってきましてね」

(え? 何だつて? 頻繁?)

宇門は耳を疑った。

「所長には言わないでくれつて頼まれてたんですがね。悪化の進行が早まってきた様なので、言わないわけにはいかないと思ひましてね」

ドクターは申し訳ないと言う顔つきだった。

「で、容態は?」

宇門はカルテをばらばらとめくりながら聞いた。

「今回は、長時間、激痛を我慢していたんでしような。ショック症状が出たようです」

「ベガトロン放射能を浴びた細胞が隣の細胞を侵し、発作の度に放射能を浴びた細胞が拡大していつてる状態ですから、その拡大が早まっている。と言うわけです。その所為で、筋肉組織にも悪影響が出て、今日のように腕が動かなくなったりするのです。最近はこちらよつとした拍子にでも発作が起きやすくなつていく様ですな。なるべく腕は動かさず、安静にしてお

た方がいい。さもないと……」

ドクターは最後の言葉は濁した。

宇門はカルテを診ながら目をみはった。

(なんと言うことだ……一緒にいなから気がつかなかった……)

「大介は最近どれくらいのパースでドクターにお世話になっていたのですか?」

「だいたい4日ぐらいの間隔で来てますなあ。大した治療じゃないから所長を呼ばなくてもいいでしょうつて」

(そんなに頻繁に?)

治療器による治療は、約二週間のペースであつたが、すべて自分がやっていくつもりだった。

「治療が終わると大介君は、決まつて所長には言わないでくれと念を押すんです。そういうわけにはいかないと言つたんですがね」

と、ドクターはため息をついた。

「これ以上よくならないのはわかつてますから。それだけでなく忙しい父さんに、これ以上心配かけたくない。余計な気を使わせたくないつて言つてましたよ」

宇門はめまいがした……

迂闊だった……わしは大介の何をみていたのだ? と宇門は自分をなじつた。

しばらくの沈黙の後、

「ドクター、大介をよろしくお願いします。このまましばらく寝かせてやってください。後で私が話をしますから」

わかりました。と言つて宇門からカルテを受け取つた。

宇門は診療室を後にし、廊下にてたが足を止め、床の一点を見つめ拳を強く握りしめた。そして一言、大介……とつぶやいた。

しばらく立ち止まっていたが、やがて決心したかのように前を向き、観測室へと向かつた。

小一時間ほどして、点滴もはずれた大介が目覚ました。

(うん……)

腕の痛みも体のだるさもなくなり、すつきりした気分だった。

右腕を動かしてみた。問題なく動いた。

(よかつた……治つたみたいだな……)

大介は起きあがつた。

するとドクターが慌てて入つてきた。

「大介君、駄目だ。まだ起きあがつちゃいかん。当分

は安静だ。今は治療した後で、治まっているだけなんだ。今動けば、すぐにまた発作が起きるぞ！」

ドクターは大介を押しつけた。

「ドクター、ありがとうございました。もうすつかり元気になりました。もう大丈夫です」

そういつて大介は立ち上がろうとした。

「だめだ！ まだ動いてはいかんぞ！」

凄じ剣幕でドクターが大介を制した。

「ドクター、申し訳ありません。こんなところで寝てるわけにはいきません。僕が寝込んでいたらみんなが不安になる……」

「大介君、君は自分の事がわかっていない様だな。いか！ 腕の傷はもうかなり悪化してるんだぞ。これ以上悪くなれば……腕を切断しなくちゃならないんだぞ」

ドクターは大介に言い放つた。

大介は目を伏せて左手で右腕をつかんだ。

しばしの沈黙の後、静かな声で、

「大丈夫です。絶対そうはなりません。迷惑かけて申し訳ありません……」

大介はドクターに頭を下げた。

ドクターは大介にそう言われて返す言葉が見つからなかつた。

「いいかね。当分の間、右腕は動かしてはいけない。少しでも痛みが出ればすぐに治療する事。それだけは絶対守ってくれ。いいね!」

ドクターはきつく大介に言い聞かせた。

わかりました。と大介は頷いた。

ドクターは棚からテーピングテープを取り出し、右腕を丁寧にテーピングした。

そして上着を着込んだ大介の右腕を三角巾で固定した。

「少し不自由だが、仕方がない。我慢するんだな……」

「はい……ありがとうございます」

大介はスクリーンで仕切られた部屋を出て、診療室を出るとき、ドクターにもう一度頭を下げた。

夕子は、迎えの大介を待っていた。

が、いくら待っても大介は来ないので、通りの道まで歩いていくと、馬車が一台来るのが見えた。

「はれえりきれいなねえちゃん」

馬車に乗っていた怡幅のいい青年は、4色の国旗の様な服を着て、牛乳のボトルを積んでいた。

「あ……こ・こんにちは」

夕子は、少し驚きながらも微笑んだ。

青年は見かけに寄らず、饒舌で人なつっこく話してきた。

警戒心をすっかり無くした夕子は、彼が街まで牛乳を届けに行くと言うので、研究所まで乗せていつてもらう事にした。

馬車を降りて一札した夕子は、研究所の入り口に入ると、警備員に呼び止められた。

「あれ？ あなたは昨日の……確か所長のお客様でしたよね」

警備員は、きれいな人だったので覚えていた。

夕子は、につこりと微笑み、

「ええ、平井夕子と言います。昨日は、先生宅に泊めていただいたんです。あの……入つてもかまいませんか？」

「そうだったんですか。所長宅へお泊まりに……」

「あつ どうぞ、どうぞ。所長は多分観測室か所長室にいるはずですから」

きれいな人につこりほほえまれて、悪い気がする人は一人もない。

警備員は、所長宅に泊まるくらい仲ならばかまわないだろうと、簡単に彼女を通してしまった。

夕子は、ありがとうございます。と振り返りながら

深々と頭を下げて歩いていった。

観測室では、佐伯所員、山田所員がメインコンピユータから送られてくるデータのチェックをしていた。

宇門は、一番中央の席に座り、難しい顔をしてメインスクリーンを眺めていた。

ウィイーーン

観測室の自動扉が開き、右手をポケットに突っ込んで大介が入ってきた。

「やあ、大介君」と山田所員が声をかけた。

はっ！ と宇門が振り返った。

「みなさんご苦労様です。何か変わったことはありませんか？」

そういいながら笑顔で、宇門の側までやってきた。

宇門は、慌てて立ち上がり、

「大介！ ちょっと来なさい。話がある」

と怒鳴って、入り口に向かって歩き出した。

「あれ？ 父さん、なんだかご機嫌斜めだな」

大介は左手で頭を掻いた。

「さっさと来なさい！」

また声を荒げ、観測室を出ていった。

「僕、何か悪いことしたっけ？ 佐伯さん知ってます？」

「いえ、私は何も知りませんが、なんだか先ほどから上の空の様な感じでしたね」

と、佐伯所員。

「そうだなあ、診療室から戻って来てから機嫌が悪そうでしたけど」

と、山田所員。

（え？ 診療室？ あっ！）

大介の顔色が変わった。そして慌てて宇門の後を追った。

入れ違いに夕子が観測室に入ってきた。

「こ・んにちは……」

夕子は、所員達におそろのおそろ声をかけた。

「あれ？ あなたは昨日の？」

山田所員は、夕子の姿に驚いていた。

「すみません、申し訳ないんですが、ここは部外者立ち入り禁止なんですよ」

佐伯所員は夕子に優しく説明した。

「ご・ごめんなさい……あの先生は……？」

夕子はいるべき場所ではないことを察し、宇門の事を聞いた。

「ああ、所長は今大介さんにお説教してるところですよ。多分所長室にいるんじゃないかな？」

と山田所員は少しオーバーに説明した。

「え？……大介さん、何かしたんですか？」

夕子は、宇門が声を荒げてゐる姿は想像出来なかった。

「いやあ普段はそういうことは滅多にないんですがね。今日はどうもかなり怒ってる様でしたよ。あれはよっぽど何かあったのかもしれないなあ……大介君、びびってましたからねえ」

佐伯所員は顎に手をかけ頭をひねっていた。

「そうですか……じゃ、失礼します」

夕子は、深々と頭を下げ、観測室を出ていった。

（先生と大介さんが喧嘩？ もしかして私の事じゃないかしら？ 今日、大介さん、迎えに来てくれなかつたし……大介さんからすれば、私は嫌な女よね？……大介さんが私のことを何か言つて、それで先生がお怒りになつてゐるのでは……）

夕子は邪推し、いても立つてもいられずに、所長室に向かつた。

コンコン

大介は青ざめた顔で、所長室をノックした。

「さつさと入りたまえ！」

所長室のデスクに座つたまま宇門は怒鳴つた。

大介は、左手でノブを回しそつと扉を開けた。

部屋に入ると、宇門がデスクで頭を抱えていた。

大介は、おそろおそろデスクの前まで歩いていき、

「父さん……すみませんでした」

と深々と頭を下げた。

宇門は、少し頭をもたげ、上目遣いに大介を睨んだ。

「なにがだね？ 何を謝つてゐるのだ？」

「いえ……あの……すみません……」

大介は、宇門と目を合わせるのが気まずくて、視線を横に向けた。

を横に向けた。

「だから 何を謝つてゐるのだ？」

宇門は立ち上がり、サイドにある応接セットの一人掛け用ソファに座つた。

「そこに座りたまえ」

そういわれても大介は動けなかつた。

宇門は、座つたまま大介を直視し、

「ドクターが言つたはずだ。しばらくは動くなよ」

「……」

「安静にしてると言わなかつたのか？ と聞いておるのだ」

「……」

「……すみませんでした……」

もう一度大介は深々と頭を下げて謝った。

ふう……と宇門はため息をつき、ソファに体を沈めた。

「そこに座りなさい」

宇門は、今度は落ち着いた声でそういった。

大介は、おずおずと3人掛けのソファに、右腕をかばいながら座った。

「まだ痛むのかね？」

宇門は心配そうに言った。

「いえ。もう全然……大丈夫です」

大介は努めて明るく話した。

「ドクターが右腕を使うなって……もうガチガチにテーピングされちゃって……全く大げさなんですから……あはは」

と大介は、左手で頭を掻いて空笑いした。

ダン！「ばかもん！」

宇門は前のめりになって、拳でテーブルを叩き、大介を大声で叱りとばした。その声は廊下まで響いていた。そしてその声は夕子の耳にも届いた。

「お前はまだわかってないのか？」

「いいかよく聞け！」と宇門は前のめりになって大介

を見据えた。

「ドクターの言ったことは、大げさでも何でもない。だからこそわしを呼んだのだ」

大介は横を向き、視線を反らせた。

「これ以上悪化すれば、その腕を切断するしかないんだぞ！」

「わかつてるのか!？」

宇門は、また大声で怒鳴った。

「そんなことにはなりません。大丈夫です」

大介も宇門を直視し、大声で応えた。

「何が大丈夫、だと言うのだ!? そのときが来たら、わしは躊躇いなく切るぞ! たとえお前が嫌だといつてもな!」

宇門はまた前のめりになって怒鳴った。

大介は、目を見開いて顔を引きつらせていた。やがて目を伏せ、頭を垂れた。

「……それだけは……」

大介は右腕を左手で押さえながら、小さな声で宇門に訴えた。

しばしの沈黙の後、

「大介……お前だけの体じゃないんだぞ!」

宇門はソファにもたれかけ、目頭を指で押さえた。

「大丈夫です。ちゃんと自分に与えられた使命だけ

は果たします。敵を倒すまでは立派に生きてみせます！」

大介は真つ直ぐな目を宇門に向けた。

そして大介は立ち上がって宇門に言い放った。

「たとえどうなろうと、僕は戦います。絶対に負けません」

「絶対に！……差し違えてでもベガ大王を倒します。……なに、ここに到着するまでに死んでいたか、後少し先で死ぬかの違いです。大差ありません。大丈夫、この体はそれまで……それまで保てば充分です」

(なっ？……)

バッチイーン！

突然宇門が立ち上がり思いつきり大介の頬を平手打ちした。

「なぜ？ なぜもつと自分を大事にせんのだ？……それまでの命とは……」

「なんて言いぐさなんだ！」

宇門は、大介の胸ぐらを掴んで語尾を荒げた。

大介は宇門の視線に耐えられず横を向いていた。

「……すみませんでした……」

胸ぐらを締め付けられながら、大介は小さい声でそういった。

「……」

「……」 宇門は言うべき言葉が見つからず手を離れた。その拍子に大介はよろよろとよろけた。

「……大介……」

宇門は呆然と立ちつくし、涙を浮かべていた。そして後ろを向き、

「大介……わしはそんなに頼りないか？」

(え？……)

大介は宇門の背中を凝視した。

「わしは……お前に何もしてやれない……父親とはよく言ったものだ……」

宇門の肩が震えていた。

(……違う……)

大介は、宇門の背中に向かって頭を振った。

「……父さん……すみません……」

宇門の肩に手を掛けようとしたが、テーピングしている所為で、右手が上がらなかつた。

そして後ろを向き、目を伏せて、

「……父さん……僕こそ……僕こそ、そんな思いを父さんにさせてしまつて……」

大介も肩を震わせていた。

「僕は……父さんにそんな思いだけはさせたくなくて……でも結果的には同じだ！」

「ぼっ！」と大介はドアに向かって走り出し、思いっきりドアを開けた。

「きゃー！」

ドアの外には夕子がいて、大介の姿を見て怯えていた。

大介は驚いて夕子を凝視した。

「待てっ！ 大介！ 待つんだ！」

宇門が、大介を引き留めようと迫ってきた。

が、大介は慌てて走り去っていった。

「大介！」

大声で叫んだが、大介は行ってしまった後だった。

宇門は夕子に気がつかなかったのか、気がつかないそぶりをしたのか、部屋に戻り、ソファに座り込み頭を抱えた。

夕子は、ただ驚いていた。宇門が取り乱すところを初めてみた気がした。

しばらくその場に立ちつくしていた夕子だったが、少しずつ歩み寄り、そして宇門の隣に座った。

「先生……大丈夫ですか？」

前のめりになって頭を抱えている宇門に、夕子は優しく問いかけた。

宇門は、無言だった。

やがて、ため息をつき頭を上げた。

「……いや……」

宇門は、またため息をつき、深呼吸をしてから、
「……とんだところを見られてしまった様だね……なに、ちよつとした親子喧嘩だよ。気にしないでくれたまえ」

そういつて、宇門は立ち上がり、デスクからパイプを取り出し、火を付けた。

そして窓辺に立ち、パイプを吹かしながら、何を見るでなく外を眺めた。

夕子は、そんな宇門の様子をずっと眺めていた。

しばらく外を眺めていると、ひかるがやってくるのが見えた。

(そうだ……)

宇門は、内線のスイッチを入れ、警備員に連絡を入れた。

「ひかるくんが来た様だが、所長室まで来るように言ってくれないか？」

と、警備員に頼んだ。

しばらくすると……

コンコン！

「おじさま、ひかるです」

「ああ入りたまえ」

と、ひかるを招き入れた。

ひかるが中に入ると、応接セットにきれいな女の人
が座っていた。

宇門は、紹介しよう。と言って、ひかるをソファに
座らせた。

夕子は、にっこりと微笑んだ。

「彼女は、昔の教え子の妹さんで、平井夕子君だ」

と、ひかるに説明し、

「夕子君。彼女は、ひかる君と言って、牧場を経営し
てもらっている牧葉さんのお嬢さんなんだよ」

と、夕子に説明した。

「牧葉ひかるです。よろしく」

と、立ち上がって頭を下げて挨拶をした。

こちらこそよろしく。と夕子も笑顔で挨拶をした。

「ひかる君。何か用事だったのかね？」

宇門は、優しく問いかけた。

「ああ……今日、大介さんが来なかつたから、どうし
たのかな？ って思つて……牛乳の配達もあつたし、
ちよつと寄つてみたんだけど……」

と、ひかるは少し心配そうに尋ねた。

「おお、そりやすまんね。大介は、今日ちよつと取り
込んで……」

と、宇門は言葉を濁した。

「甲児君ね！ 昨日からそればかりなんだから……
大介さんがいないと、仕事がかどらなくて……今度
は絶対甲児君にも仕事手伝つてもらうんだから。も
う！」

と、ひかるはふくれつ面をしてみせた。

「ははは！ 宇門は、とりあえず甲児の所為にして
おこうと思つた。」

宇門は、ひかるの明るさに救われる気がした。

夕子は、お茶目なひかるが、とても気に入つていた。

「ひかる君。もし何も他に用事がないのなら、すまん
が夕子君を牧場に案内してもらえないかね？」

宇門は、笑顔でひかるに頼んだ。

「ええ、いいですよ。そうだ、新しく子犬が来たんで
すよ。きつと夕子さんも気に入ると思うわ」

と、ひかるは応えた。

「ああ……ひかる君に似た、美人の子犬の事だね？」

ふふふ。と笑いながら宇門が言うと、

「まあ、大介さんね？ おじさまに変なこと吹き込ん
だのは！ もうっ！」

ひかるは、またふくれつ面をしてみせた。

「ははは！ じゃ、お願いするよ。と宇門は笑顔をみ
せた。」

じゃ、夕子さん行きましょう。と夕子を伴つて出か

けていった。

部屋で一人になった宇門は、ふう、とため息をつきながらソファに深々と座った。

ヒュウウー ヒュウウー

冷たい風が音を立てて吹いていた。

大介は、研究所で一番高い、ヘリポートにいた。コンクリートに座り込み、片膝を立てて遠くを見ていた。

風が大介の髪を揺らしていた。

大介は、情けなかった。自分の事で周りの人が傷つくのが耐えられなかった。もうどうしたらいいのかわからなかった。

宇門に殴られた頬がキリキリ痛んだ。そしてそれは宇門の心の痛みにも思えて、また胸が苦しくなった。

(……父さん……)

頬を手で押さえながら大介は臉をぎゅつと隠り、そのままいつまでも動かなかった。

ヒュウウー ヒュウウー

ヘリポートにたどり着いた宇門は、絶句した。

冷たい風が吹く中、小さくなって肩を震わせている大介に、なんと声をかけたらいいいのか……。

自国を追われ、たった一人になって、やっと安住の地を見つけたと思つたら、地球の存亡を一手にその肩に背負わなければならなくなった。そしてそれは、自分の命と引き替えだった。誰にも何も言わず、すべて自分の胸の内にしまい込み、ただ一人で藻掻き苦しんでいる。まだ二十歳そこそこの若者が、これほどの使命を受けなければならぬのか？

それが彼の運命なのか？ 受け入れる以外に方法はないのか？

受け入れるしかないのなら……神様というのは、なんと残酷なんだろうか。

宇門は、少しでも苦しみを和らげてやりたいと切に願った。

宇門は大介の側に行き、その肩をそつと抱いた。
(?!……)

「大介、こんなところにもいつまでも居たら、体に障る。部屋に戻ろう」

宇門は小さな子を諭す様に声を抑えて大介に言った。

大介は、顔を背けながら小さい声で、
「……父さん……僕は父さんを苦しめるつもりはな

「かつたんです。……ただ……僕は……」

「そういつて大介は、また顔を伏せた。」

「大介……もういい……何も言うな」

「そういつて、そつと大介を立ち上げさせた。」

「キキキキー！」

「え？　なんて？」

「ひかるは、急ブレーキをかけた。」

「いえ、さつき、先生と大介さんが言い争つてい

て……先生が大介さんをひっぱりたいみたいだった

から……私は、外に居たから話の内容はわからなかつ

たんだけど……でも先生が凄い剣幕で……」

と夕子は、さつき見聞きした事をひかるに話してい

た。

「それから先生は、かなり落ち込んでる様だつたか

ら……」

「……珍しいわ。おじさまがそんなにお怒りになるな

んで」

ひかるは不思議に思った。

（大介さんに手を挙げるなんて……そんなこと考え

られないわ……）

「私の事ではないかしら？」

とひかるに尋ねてみた。

「え？」

「私、昨日突然来て、自宅にまで押し掛けていったで

しょう。知らない女が急に家の中でうろうろされた

ら、大介さんも気分悪いわよね」

（あつ！）とひかるは思った。

（だから昨日大介さんは早く帰りがらなかつたの

だ）

（でも、大介さんは、そんなことを口に出して言う

人じゃない……）

夕子の顔は、自分の所為かも？　と言う思いで、しよ

げていた。

「それは違うわ。大介さんは、そんなことでおじさま

と喧嘩するような人じゃないわ」

ひかるは、夕子の疑念を思いつきり否定した。

「まあ、大介さんのこと、よくわかるのね」

そう言われたひかるは、真つ赤になつて照れた。

「と、とにかく……夕子さんも気にしないで。あの親

子には、普通の親子にはない特別な絆で結ばれてるん

だから。……大丈夫……」

と、夕子には心配しないように笑つて応えた。

改めて車を発進させ、牧場へ向かったが、今度はひ

かるが気になって仕方がなかった。

宇門は、研究所で普段使っているプライベートルームまで大介を引っ張って行った。

「ここなら誰も来ない。今日はとりあえずゆつくり休め」

そういつて、渋る大介をベッドに無理矢理寝かせた。

「いいか！ 今日絶対安静だぞ！」

宇門は、上掛けを掛けてやり、大介に念を押した。

「……父さん……」

部屋を出ていこうとしている宇門に声をかけた。

ん？ と振り返ったが、その後の言葉は聞き取れなかった。

次の言葉を待ったが、やがてドアを静かに開けて出ていった。

宇門は、観測室のドアの前でため息をつき、気を取り直して中に入った。

「あつ所長」

佐伯所員が待ちかねたように声をかけた。

「どうしたんだね？ 佐伯君」

「いえ、どうも怪しい動きがあるんですよ。まだ何も言えないんですが……」

宇門は、佐伯の出したデータをのぞき込んだ。

「うーむ。おかしいな……隕石の様だが……それにしても動きが怪しい。スペシャル探査レーダーで資質を分析してみてくれたまえ」

はい。と言つて、佐伯所員はレーダーに探査位置を打ち込んでいた。

「出ました！ 表面は隕石と同じですね……」

コンピュータがはじき出したデータを宇門に渡した。

「うーむ」

「後少し近づけば、メインスクリーンにとらえることが出来ます」

と、山田所員は伝えた。

わかった。と宇門は、メインスクリーンの前に座つた。

ピッピッピッ

「メインスクリーン！ 出ます！」

山田所員は、メインスクリーンの焦点を絞った。

「あつあれだ！」

佐伯は叫んだ。

「うーん。まだわからんな。もう少しズームしてくれんか？」

「後少し待っててください」

ピピピッ

「ズームアップOK！ メインスクリーン切り替えます」

「うーん……おかしいぞ？……隕石の中から角らしき物が見える」

「もつと拡大しろ！」

宇門は、スクリーンを見ながら叫んだ。

ピピピッ

「あつ！ あれは……やつぱり円盤獣だ！ 隕石でカモフラージュしてるんだ」

「大介君を呼びます！」

佐伯所員は、緊急コールボタンに手を伸ばした。

「待てっ！」

宇門は、慌てて制止した。

「だめだつ！ 今日、グレンダイザーは出撃出来ない。いや、出撃させない」

「し・しかし……グレンダイザーが出ないとなると、どうやって円盤獣を止めるんですか!？」

「全防衛軍にすぐに連絡してくれたまえ。円盤獣が出撃してきたと。迎撃要請をしてくれ」

「……わかりました」

と言うと、佐伯所員は、すぐに全防衛軍のホットラインを開いて迎撃要請を送信した。

(何とかくい止めてくれ……)

宇門は、目を瞑り祈った。

「円盤獣、大気圏突入！」

「到着予測場所を測定してくれ」

ピピピッピッ

「出ました！ どうやらこの近くですな」

「緊急避難警報を出してくれ。各市町村すべてにだ！」

わかりました！ と佐伯は、スイッチを入れた。

ウーン ウーン ウーン

カーンカーンカーン

街や村にサイレンが響き渡った。

いつものごとく、櫓に登って、望遠鏡を覗いていた

団兵衛は、

「UFOがくるぞー！」

と叫んでいた。

「お父さん！」

夕子と二人で子犬と戯れていたひかるが叫んだ。

スルスルーと櫓を滑り下りてきた団兵衛に、お願いと言って子犬を預け、夕子さん行きましよう」と夕子の手を無理矢理引つ張った。

「こりゃ！ ひかる、どこへ行くんじゃ!?」

「研究所!」

「なんじゃと！ 待ちなさいいい！ ひかるう!」

団兵衛が止めるのも聞かず、夕子をジープに乗せ走りだした。

「いったい急にどうしたの?」

ひかるの慌てた姿に、夕子は面食らっていた。

「UFOが来たのよ。……大介さんが心配なの……」

ひかるは、思い詰めた顔で応えた。

「え? どういうこと?」

夕子は、ひかるが言った意味が分からなかった。

「あつ……いえ、何でもないので。とにかく危ないから研究所に避難しましょう」

ウーン ウーン

研究所に緊急警報が鳴り響いた。

仮眠室で寝ていた甲兎と林所員が飛び起きた。

「やべー!」

と言いながら、甲兎は観測室へ向かい、林所員も後

に続いた。

「プライベートルームで寝ていた大介も飛び起きた。」

「くっそー!」

上着を脱ぎ、テーピングテープをはずした。

(父さん すみません……) とつぶやきながら……

そしてもう一度上着を着込み、観測室へ向かった。

観測室に駆け込んできた甲兎と林所員は、

「なにがあつたんですか?」

「円盤獣だ。こつちに向かっている」

山田所員が説明した。

林所員は、いつもの持ち場に入り、データ分析をはじめた。

「ちくしょー! 俺に足がないのを知つててやつてきやがつたな!」

「グレンダイザーはどうしたんですか? もう出撃したんですか?」

「グレンダイザーは出撃しない!」

振り返らずに宇門は甲兎に言い切った。

「え? なぜです?」

そこへ大介が走り込んできた。

「どうしたんですか?」

「あっ大介君。円盤獣が……」

山田所員が、説明した。

「出ます！」と大介が走り出そうとすると、

「だめだ！ 大介はいかせん！」

宇門は、大声で大介を制した。

(父さん……)

大介は拳を握り締めた。

「ええーい！ なんなんだ！ 何があつたんだ？」

甲児はいらついた。

プ・プ・プ

「所長！ 防衛軍からの緊急コールです。グレンダイザーの出撃要請が来てます」

佐伯所員が伝えた。

「無視しろ！ とにかくグレンダイザーは出撃しない！ いいな！」

宇門は、みんなに向かつて大声で指示した。

「ええーい！ 俺がサイクロンビームでやつつけてやる！」

「待て！ 甲児君！ 僕が行く！」

と大介は甲児を制した。

「だめだ！ 大介！ グレンダイザーは出撃しないと

と言っているだろう！」

宇門はどうあつても譲らない。

「ええーい！ 我慢できなくなつた甲児は、走り去っていった。」

「待ちたまえ！ 甲児君！」

宇門が制止したが、後の祭りだった。

プ・プ・プ

プ・プ・プ

「所長、全防衛軍緊急コールです。どうしますか？」

「佐伯所員が慌てて尋ねた。」

「……」宇門は応えない。

「父さん、行かせてください。お願いします」大介が懇願しても宇門は応えなかつた。

リン・リン・リン

研究所の電話が鳴つた。

「無視しろ！」

リン・リン・リン

「所長、研究所の電話回線が、すべてコールしてます。もうパンク状態です」

宇門は目を瞑つてただ我慢していた。

「くそっ！」

とうとう大介は飛び出して行つてしまった。

「待て！ 大介！」

宇門が立ち上がつて叫んだが、大介は走り去つた後

だった。

「馬鹿者！」 宇門は叫んだ。

廊下を走りながら、大介は、

(父さん……すみません……)

と心の中で叫んだ。

宇門は中央座席に座り、

「グレンダイザーが出撃する。モニタしてくれ」

林所員が、モニタのスイッチを入れ、大介の位置を

モニタで追っていた。

「グレンダイザー出撃準備完了」

宇門は、グレンダイザーのコックピットの回線を開いた。

「大介、どうしても行くのか？」

こくん。と大介はモニタ越しに頷いた。

「いいか大介！ 絶対無茶はするな！ 防衛軍にも援

護要請しておく」

こくん。と頷いた大介は、「グレンダイザーGO！」

とスロットルを引き、かけ声とともに飛び出して言った。

「全防衛軍に連絡してくれ。グレンダイザーが出撃したと。援護の要請をしてくれ」

はい。と佐伯所員は、全防衛軍のホットラインをすべてオンにし、送信した。

ゴオオオー

「あつ！ あれは？」

夕子は、上空をとんでいくグレンダイザーを見て驚きの声をあげていた。

(大介さん……出撃したんだわ……)

ひかるは、大介の無事を祈りながらジープを走らせた。

甲児は、ジープにサイクロン砲を取り付け、円盤獣が暴れている付近目指して走っていた。

「いったい、どうなっちゃまったんだ？ 所長と大介さ

んの間に何があつたんだ？」

「グレンダイザーが出ないととなると、もう戦えるのは

俺しか残ってねえじゃねえか！」

「みてろよー！ でっかい風穴あけてやるからな！」

そう言いながら、甲児はアクセル全開で突っ走っていった。

ゴオオオー！

「あつ？ グレンダイザーだ！ 大介さん、出撃したんだな。よーし！ 俺も行くぜ！ 待ってろよ！」

メインスクリーンでは、グレンダイザーと円盤獣の戦闘が繰り広げられていた。

円盤獣は、変身して虎の様な形になった。頭に角が生えていて、それは一角獣にも見えた。

「大介！ 気を付けろ！ なるべく上空から戦うんだ！ 敵はどんな戦法で来るかわからんからな！」

宇門は、グレンダイザーのコックピットのモニタに向かつて指示した。

「はい！」

大介の声がモニタのスピーカーから聞こえてくる。

「うむ……」

宇門は、円盤獣の目的を探っていた。

「なぜあんなところに円盤獣がやってきたんだろう？ あそこは、死火山と高い山脈があるだけで、別段取りたてて何もないはずだが……」

宇門は不思議に思った。

佐伯所員は円盤獣が降り立った付近の探査をしていた。

「そうだ！ あそこは確か……」

カチャカチャカチャ……

佐伯は、心当たりのあるポイントを打ち込んでみた。

「やつぱり……」 佐伯所員は、目を見張った。

「所長！ あの山岳地帯のところに国防軍の秘密基地があるんです。まだ建設中なのでおおつぱらにされていないんですが……」

「え？ なんだって？」

「なんでも、対UFO用の基地らしいんです。見かけは観測所ぐらいにしか見えませんが、地下にかなりの設備を設置する事になっています。……ちよつと待ってください……」

佐伯は、自身のコンピュータを操作仕始めた。

ああやつぱり……

「一昨日、メインエンジンを機動させてますね。もしかししたら、この強力なパワーをベガ星連合軍がキャッチしたのかもしれない！」

「そうだったのか……道理で……最近頻繁に国防軍がうちにコンタクトしてきてるのはその為か！」

宇門は、腕組みをし、佐伯所員の情報を聞いていた。

「で、一斉に防衛軍がグレンダイザーの出撃要請してきたのだな……いつもよりあたふたとコールしてきたからな……」

「大介は、いわば盾か！ くそー！」

「しかし、佐伯君 なぜそんな情報を持つてるんだい？ それは軍の、いわばトップシークレットじゃない？」

いのか？」

「え？ あっ……あの……軍に友人がいます……」

佐伯所員は、頭を掻いて、言葉を濁した。

「気を付けたまえ。悪けりやスパイ容疑で拘留されかねんぞ！」

宇門は、じろつと睨んだ。

「あはは！ そんなドジはしませんよ……ちゃんと痕跡は消してますから……あっ、おつと……」

佐伯所員は、慌てて口を塞いだ。

メインスクリーンでは、グレンダイザーが虎の様な円盤獣と激しい戦闘が続いていた。

「大介！ どうやらその付近に国防軍が基地を建設中らしい。奴らの目的は多分その基地を破壊することだ」

「わかりました！」

スピーカーから大介の声が帰ってくる。

キキイイー！

研究所の玄関にジープを横付けし、ひかると夕子は研究所に走り込んできた。

「夕子さん、危ないからここで待っていて」

と応接室を指さし、ひかるは観測室に向かつて走っ

ていった。

「あっ待って！ ひかるさん、待ってよ！」

夕子は、何が起きているのかわからない。応接室に入っては見たが、不安で落ち着かなかった。

（やつぱり行ってみよう……）と夕子は、そつと応接室を抜け出し、観測室へ向かった。

キキイイー

観測室のドアが開き、ひかるが入ってきた。

メインスクリーンに円盤獣とグレンダイザーが戦っているのが見えた。

（大介さん……頑張つて……）

ひかるは指を組み、目を伏せて無事を祈った。

虎型円盤獣は、爪からミサイルを飛ばして来た。それを辛くも避け、スピンスーパーで反撃したが、円盤獣は、前足でたたき落とした。

メルトシャワーを発射。が、円盤獣はすばしっこく逃げた。

観測室の全員が、メインスクリーンに釘付けとなった。

そんな中、夕子が観測室の扉を開けた。が、誰も気がつかなかった。

(あっ！……！)

夕子は驚いた。驚きのあまり声が出ない。大きなスクリーンに怪獣の様な生き物と、円盤の様な物が入れ混じって動いていたのだ。

夕子は、後ずさりしながらも、扉の外からそつと様子をうかがっていた。

虎型円盤獣の角が光り、咆哮とともに火炎ビームを発射した。

グレンダイザーは、かろうじて交わした。

「ううっ……」

突然大介が右腕を押しさえてうなり出す。

「大介！ ベガトロン放射能だ！ 逃げろ！ 逃げるんだ！」

宇門は、大声で叫んだ！

(え？ 大介さん？ あれは大介さんなの？)

夕子はもう何がなんだかわからなかった。

「う……父さん……大丈夫です。最後まで戦います」

モニタに映った大介が右腕を押しさえながら応える。

「駄目だ！ 大介！ 帰還しろ！」

宇門は叫んだ！

(大介さん……) ひかるは祈りながらつぶやく……

「所長、今大介君が帰還したら誰がヤツを倒すんで

す？ 無理です！ 何とか阻止してもらわねば……」

佐伯所員は、冷静に宇門に話した。

宇門は、頭を垂れ、拳を握りしめ、わなないていた。

「ヤツには、空中戦は効かない。接近戦で戦います」

大介はそう言うと言頭のレバーを引いた。

「止める！ 大介！」

「ダイザーGO！」

グレンダイザーは、虎型円盤獣の前に降り立った。

「スクリュークラツシャーパンチ！」

が、円盤獣はすばしっこく逃げる。

逃げながら咆哮をあげ、火炎ビームを発射してきた。

辛くも避ける。

「う……」

モニタの大介は、腕を押しさえて唸っている。

「危ない！」

宇門は、叫んだ。

その際に虎型円盤獣はグレンダイザーに襲いかかってきた。

グレンダイザーを押し倒して上からのしかかり、グレンダイザーの顔に向かって火炎ビームを発射した。

「うわあああー！」

大介が腕を押しさえて叫んだ。

「大介ー！」

宇門には、もうどうしようもなかった。

「ぐわああー！」

大介の叫び声が観測室に響き渡る。

「大介さん！」 ひかるも大声を上げた。

「は・反重力ストーム！」

大介は脳天まで突き抜ける激痛に耐えながら、スイッチを入れる。

虎型円盤獣は吹き上げられた。が、宙返りをしながら着地した。

コックピットモニタでは、腕を押さえながら肩で息をし、あえいでいる大介が見えた。

何とかグレンダイザーを立ち上がらせようとしたそのとき、円盤獣が体当たりしてきた。その勢いで、グレンダイザーは吹っ飛んで、岩盤に突っ込んだ。

モニタに映る大介は、前のめりに倒れ込んで動かない。

「大介！ 起きろ！ 起きるんだ！」

宇門の声に大介はよろよろと体を起こした。が、起こしただけで荒い息づかいのまま目を伏せている。頭部と胸部を強打した所為で、頭からドクドクと血が滴り落ちてきた。

すかさず円盤獣がまたのしかかってきて、火炎ビーム

を顔に発射する。

「ぐはっ！……！」

大介がまた前のめりに倒れた。

動かないグレンダイザーの頭を円盤獣は、おもちゃの様に右へ左へと殴打する。そして火炎ビームを放射する。

「……ス・ピン・ソーサー……」 大介は、スイッチのスイッチを入れた。

虎型円盤獣の背中に当たり、のけぞった。

グレンダイザーは、その隙を見て逃げだし、立ち上がろうとした。が、突進され、吹き飛ばされる。そしてまた上にのしかかり、火炎ビームを発射していた。

大介の体を激痛が突き抜ける。グレンダイザーステムの操縦者の危険を知らせるアラームが、黄色の点滅に変わる。だんだん意識が遠のいてくる。が、かろうじて踏ん張っていた。

（……負けるものか……負けるものか……） ただその一念でなんとか意識を保っていた。

キキキイー！

甲児のジープが、グレンダイザーと円盤獣の前方に

到着した。

「はっ！ 大介さん！」

「ちくしょー！ なんて事しやがるんだ！ 待つてろよ！ 大介さん！ 今サイクロンビームをお見舞いしてやるぜ！」

甲児は、ジープの荷台に飛び移り、サイクロン砲を操作し始めた。

円盤獣は角を光らせて、火炎ビームを発射していた。

「あれは？ よし、あの角を狙えば……」

甲児は、焦点を絞った。

「行くぞ！ サイクロンビーム！」

ヒュンヒュンヒュン、ズバババーン！

サイクロンビームは、見事円盤獣の角を砕いた。

円盤獣は、頭を押さえ、藻掻いていた。

「やった！ へーんだ！ 甲児様の威力を見たかー！」

「い・今だ……」

大介は、霞む目で、シオルダーブーメランを発射した。

バシユン！ バシユン！ 虎型円盤獣の両腕が切断された。

円盤獣がのたうち回る。

大介は、すかさず、もうほとんど感覚はなく動かない右腕を無理矢理伸ばし、スペースサンダーをぶち込んだ。

稲光が走り、円盤獣に命中した。

バシユン！ ズババババーン！

円盤獣は、吹き飛んだ。

大介は、はあと息を吐き、意識を解放した。そして体勢を崩し前のめりに倒れ込んだ。

「大介！ 大介！ しっかりしろ！ おい！」

大介の返答はなかった。

「大介さん！ しっかりして！」 ひかるは悲壮な声で叫んだ。

グレンダイザーのアラームが、黄色から赤に変わった。グレンダイザーが自動操縦に変わる。

ピコン！

観測室では、グレンダイザーのモニタパネルに、グレンダイザーが自動操縦に変わった事を知らせた。

「よし！ 誘導電波発射せよ」

はい。と林所員は、スイッチを入れた。

宇門は、インターホンのスイッチを入れ、

「医療班！ グレンダイザーが帰還する。すぐに格納庫に急行せよ」

ふう……とため息をつき、宇門は椅子に座り込んだ。そして瞑目した。

「所長……大介さんと何があつたのですか？」

おそろおそろ佐伯所員は、宇門に聞いた。

「……」

「所長……言いくいのはわかりますが、今後こんなことがあると我々も、どうしていいのかわかりません……」

「我々では、力になれませんか？」

その言葉に、はつと宇門は佐伯所員の顔を見上げた。そしてまたため息をつき、静かに瞑目しながら話を始めた。

「……」

「……大介は……あいつは、腕の傷が悪化していたのを、わしに隠していたんだ」

「隠しているだけならまだいい。昨日も一晩中ずつと激痛を我慢していたらしい。わしがそばに居たにも関わらずだ。……昨日は客が来ていたし、わしにも気を遣ったのだろう。馬鹿だよ。我慢しすぎて腕が動かなくなつた。どうしようもなくて、朝一番にドクターのところを駆け込んだというわけだ」

一同は、固唾をのんだ。

「今日、ドクターから呼び出しがあつたのは、そのことだったのだ」

「絶対安静と言われていたのに、大介は平気な顔をして、わしたちの前に顔を出した。それに腹を立てたわしは……」

「考えてみれば大介は、みんなにとつては唯一の砦だ。自分が元氣じゃないと所員達も不安になる。自分が大丈夫だと言えば、みんなが安心すると思つているのだ」

「だから何も言わない。いや、言えない。一人ですべて背負つているのだ……」

「わしは、そんな大介の気持ちも考えず、怒鳴り散らして、拳げ句の果てに手をあげた……」

「ふふ……笑つてくれてかまわんよ。わしは、とんだ父親だ……」

ピッピッピッ！

「グレンダイザーが、帰還しました。今、格納庫にて定位置に異動中です」

「医療班！ 停止次第、救出作業開始。完了後、直ちに集中治療室に搬送してくれたまえ」

宇門は、インターホンに向かって指示を出した。

「所長……大介君に伝えてください……我々は、すでに覚悟もできている。非力だけど、共に戦う仲間つ

もりだと……」

佐伯所員は、まっすぐ宇門を見つめ、熱いまなざし
で応えた。

うん。と他の所員も頷く。

ひかるは、大粒の涙がこぼれるのもいとわず、宇門
の肩を優しく抱き、静かに瞑目した。

（大介さん。私もあなたの力になりたい……もう女
の子は、卒業だわ……）

ひかるは、自分の力で立って歩けるようになりた
い。そしていつか一緒に……と願うのだった。

「みんなありがとう」

肩に置かれた、ひかるの手を握り、

「大介も一人ではないのだと……みんなが居ることを
わかって欲しいのだ……」

「こちら医療班。救出完了。これより集中治療室に搬
送します」

「わかった」

宇門は、スイッチを切ると、慌てて走り出した。
入口の扉の隅に、ぺちゃつと座り込んで、目を真っ
赤にしている夕子を見つけた。

一瞬目が合ったが、そのまま集中治療室に向かって
また全速力で走り出した。

ひかるも涙を拭き、走り出したが、夕子を見つけ、
「夕子さん……どうしてここへ……」

ひかるは足を止めた。

夕子は、まっすぐひかるの目を見つめ、

「早く行って！」

とひかるを促した。

「……ごめんなさい……」

と言いながら走り去った。

しばらく呆然としていた夕子だったが、やがてよろ
よろと立ち上がり、打ちひしがれたようにその場を後
にした。

集中治療室の前のエレベーターで宇門はいらいら
と到着を待ちかまえた。

チンツ

エレベーターのドアが開いた。

ストレッチャーに乗せられて、やってきた大介は、
酸素マスクを装着されて弱々しく呼吸していた。

顔半面血だらけで、意識はなく、上半身裸の胸には、
あつちこつち強打による内出血が見られ、右腕は、二
の腕はもとより、肘から下も赤黒く腫れ上がり痛々し
くて凝視できないくらいだった。

思わず宇門は、ストレッチャーに寄りかかり、

「大介！ 大介！」と呼んだ。

宇門はストレッチャーと共に異動しながら、何度も何度も名前を呼んだ。

その声に反応したのか、大介は片方の目だけを少し開けた。

左指を少し動かし、

「……父・さん……」

と、小さな……小さな声でつぶやいた。

「わかるか？ 大介！」

左指が、宇門の服の袖を少しだけ引つ張った。

「……」

何かを言おうとしているが、聞き取れない。

「もういい！ 今は何も言うな」

宇門がそういうと、また袖を引つ張った。

何か言いたいのだろうと、大介の口元へ耳を当てた。

「……」

(！…………)

宇門は絶句して立ち止まった。

大介を乗せたストレッチャーは集中治療室へと入っていった。

宇門は、入口で呆然としていた。

「所長！ 早く来てください！」

中でドクターが呼んだ。

宇門は、慌てて中へ飛び込んだ。

治療台に移された大介が荒い息の下から、うわごとの様に何かを言おうとしていた。

宇門は、大介の手を握り、大丈夫！ 大丈夫だから……心配するな。と言った。

それを確認した大介は、少しだけ微笑み、意識を手放した……

観測室に甲児が飛び込んできた。

「大介さんは？」

甲児は、ぜいぜいと息を切らし、体を折り曲げて、膝に手を当てながら聞いた。

「あつ！ 甲児君！……大介君は、今集中治療室だ」
林所員が応えたが、皆一同心配そうな面もちだった。

「大丈夫なのか？」

息を整えながら、甲児が聞いたが、誰も答えなかった。

「今、所長とひかるさんが行ってる」

「そっか……きつと大丈夫さ！ あいつは不死身さ……」

所員一同は、顔を見合わせた。

「何？ なんなんだ？」

甲児は、なんだか違う空気が漂っているようで訳が分からなかった。

「そう言えば今日、はなつから様子がおかしかったよな。なんかあったのか？」

所員達は、ふーつとため息をつき、一様に顔を見合わせた。

「我々が勝手に話していいものかどうか……」

「でも、甲児君が一番大介君の力になれる人だからな……」

実は……と所員達は、甲児に先ほど聞いた話を説明した。

ひかるは、集中治療室の外で祈りながら待っていた。

中では、ドクターと宇門がてきばぎと治療を行っていた。

頭部裂傷と胸部打撲により肋骨を2本骨折。

後は、右腕の古傷の悪化だった。

「うぐむ。ひどいな……こんな腕でよく戦えるもんだ。拷問を受けているようなもんだな。よし、放射線

治療を行おう。一息にと言う訳にはいかないが、何回かに分けて叩こう……しかし……」

「……所長、放射線治療をしても完治は出来ませんよ。ただ悪化を押さえるだけです。大介君の体の事を考えたら、今切断した方がいいと思いますけどね……」

「……」

宇門は、答えられなかった。

「もうあまり猶予はありませんよ。こんな戦い方していたら……」

「命があつてこそ……じゃないですか？」

ドクターは宇門を説得するように話した。

「……わかつています……私も出来ればそうしたい……命には代えられないと思つています」

「……だが本人が納得しないでしょう。……大介は、それを極端に恐れている……」

「今日、私が怒りに任せて、切断すると断言してしまつたんです」

「だから……だからさつきも、それを心配して、うわごとの様に何度も私に頼んだんです。切らないでくれ……つて……」

「多分、今度こんな事があつたら無理矢理切断されてしまうと思つたのでしょう。かわいそうに……」

「確かに切断すれば、彼の命は助かるかもしれない

い……そうなる、もう戦うことは出来ない」

「戦わなくていいのなら、それほど大介も思い詰めることもなかったでしょうが……でも、戦う者は自分しかない。それをわかっただけで戦いを放棄する事は……多分、大介にとつては命を落とすことより辛いことなんです」

「何もかも全部一人で背負って、ぎりぎりのところで踏ん張ってるんですよ」

「もし、今切断してしまつたら……多分命は救えても、心は……切断されてしまう……」

「そんな大介に私は、ひどいことを言つてしまつたんです……」

宇門は、悲壮な思いを話した。

「大介は、私とその判断を下すために苦悩するだろうと思つたからこそ、なるべく私に内緒にしていたんだと思います……」

しばしの沈黙の後、

「彼は、大国の王子として育つたのですから、自分の事より人の事を優先する事を、当たり前のように教育を受けて来たんでしょう……だから……自分の運命をすべて受け入れ、それでも向かつて行くこととしていたのだと思うのです」

宇門は、意識のない大介の顔を見ながら、両手で大

介の左手を握りしめた。

「悲しい運命ですな……」

ドクターも悲痛な面もちで頷いていた。

フツ。集中治療室のランプが消えた。

ひかるは慌ててドアの前に立った。

しばらくして宇門がため息をつきながら出てきた。

「おじさまっ！ 大介さんは？」

ひかるは必死だった。

「おお……ひかる君。すまなかつたね。大介は大丈夫だ。今は眠っているよ」

宇門は、ひかるに安堵の顔を見せ、微笑みながら説明した。

ひかるは、大粒の涙を流しながら、

「よかつた……よかつたわ……」

宇門は、ひかるを抱き寄せ、よしよしと頭をなでた。

「おじさま。大介さんの側に行つてもいいですか？」と切なそうな顔をして聞いた。

「ああ、いいよ。側に付いていてやつてくれるかい？ ああ見えて、大介は寂しがりやだからな。ひかる君が側にいると安心すると思うよ」

ふふふつと宇門が笑つた。

「ありがとうございます。おじさま！」

ひかるは、満面の笑みを浮かべ中へ入っていった。

「所長！」

宇門が観測室に入ると、所員や甲児が心配そうに側に飛んできた。

「ああみんな、心配かけたね。もう大丈夫だよ。しばらくは動けないだろうが、すぐに元気になるさ」

ああよかったー！ と一様にみんな椅子に座り込んだ。

「ああ、甲児君。今日は大活躍だったね。君のおかげで大介は命を落とさずにすんだ。本当にありがとう」

宇門は、甲児の功績を讃えた。

「いやあ、あれくらい軽いもんつすよ！ いつだつて俺がすつとんで行つて敵を倒してやりますよ！」

「あはは！ 甲児君は頼もしいね」

あはは！ 宇門の笑い声に、一同もあははと声をあげて笑った。

「甲児君。実はね、新しい戦闘機を考えてるんだよ」

「え？ 戦闘機ですか？」

甲児は、きよとんとした。

「君のサイクロン砲を搭載したいと考えているんだ。協力してもらえないかね？」

「協力も何も、サイクロン砲を積み込めるなんて凄じやないですかあ。任してくださいよ！ あつ？ 俺の円盤……」

「今日みたいに、ぎりぎりの戦いではいずれ負ける時が来る。グレンジイザーの欠点をサポート出来る戦闘機を今開発中なんだ。君にもこのプロジェクトに参加してもらおう。よろしく」

「やつたー！ なんだかガンガンやる気がわいてきたぜつ！ よし！ やるぞー！」

甲児は、ガッツポーズをしてみせた。

「あはは！ さすが甲児君だ！」

「さてと、わしは所長室にいるから、何かあつたら知らせしてくれ」

そう言つて宇門は、観測室を後にした。

所長室に入ると、どつと疲れが出てきて、ソファの長椅子に横になった。

しばらくいろいろ考えていたが、やがて意識が遠のいていった。

夕子は情けなかった。自分の事しか考えずに大介をなじつていた自分が恥ずかしかつた。

「帰ろう……」

ここは自分の居るべき場所ではない事を悟った夕子は、入り口の警備員にお願ひし、車を借りて荷物を取りに行った。

主の居ない宇門邸は、ひっそりと佇み、夕子を拒絶しているように見えた。

エプロンを鞆に詰め込んだとき、涙が溢れてきた。

自分は、この15年間何を思つて生きてきたのだろう。ただ時に流され、過去だけを見つめて生きて来た。生きるってなんだろう。私も強くなりたい……大介さんのように……

私は、私の居場所に帰つて、今度は前を向いて歩こう……

夕子は、今までの自分も一緒に鞆にしまい込み、新たな一歩を踏みしめる決心をした。

コンコン

夕子は、所長室のドアをノックした。

返事はなかった。ドアノブを回してみると開いた。

(先生がお戻りになるまで、ここで待たせてもらおう)

と夕子は、中に入った。

すると、応接セットの長椅子で、宇門は横になつて

寝入つていた。

かなり疲れているのか、一向に目を覚ます気配はなかった。

こんなところで寝ていたら風邪を引くだろうと思ひ、コート掛けに掛けてあつた背広の上着をそつと掛けてやった。

先生……とつぶやきながら……

プープー

内線の音が鳴つた。

宇門は、飛び起きた。側に夕子が居てびっくりしたが、とりあえず内線コールに出た。

「はい、宇門だが」

「こちら集中治療室です。大介さんの様態が安定してきましたので、上の階に移動させようと思うのですが……」

「わかつた。よろしく頼む」

「あつ！ すまんが、やつぱり景色がいい最上階の部屋に移してくれんかね？」

「わかりました。では」

ふーつと息を吐きながら、デスクの椅子に深々と腰を下ろした。

「大介さんは大丈夫なんですか？」

夕子は、心配そうに聞いた。

「ああもう大丈夫だ。君にも心配かけたね」

宇門は、夕子に微笑んだ。そしておもむろに立ち上がった。

「わしは、ちよつと大介の顔を見に行つてくるが、君は……」

「あの、私も一緒に行つてもいいでしょうか？」

宇門は、少し怪訝な顔をしたが、わかつた。と頷いた。

宇門と、夕子は連れだつて最上階の部屋にやつてきた。窓辺にベッドが置かれ、大介が静かに寝ていた。

頭、胸、右腕と包帯が巻かれ点滴のチューブを付けていた。

側には、大介の左手をしっかりと握り、ひかるがまだ心配そうに付き添っていた。

「やあひかる君。ざーつと付き添つてくれたのかい？ すまなかつたね」

ひかるは、はにかむように笑つた。

「もう大介は大丈夫だよ。そろそろお帰り。こんなに遅くなると、団さんも心配しているぞ」

ううん。とひかるは首を横に振つた。

「大介さんが目覚めるまで、ここに居ます」

ひかるは、大介の顔を見つめてそう言つた。

「そうは言つてもな、まだ若い子が朝帰りじゃ、今度はわしが団さんに縛り首にされてしまうよ。ははは！」

「わしが付き添うから、心配しないでお帰り」

とひかるをなだめるように優しく微笑んだ。

「あつ……あの……私に大介さんのお世話をさせてもらえないかしら？」

え？ と二人が夕子の顔を見た。

「いや、そうは言つても……」

「お願いします。せめて一晩だけでもお世話させて下さい」

「私、何かしたい……でもどうしていいかわからない。

だからお願いします」

「夕子さん……」

ひかるは、なんだか夕子の気持ちがわかるような気がした。

「わかつたわ、夕子さん。大介さんの事、お願いします」

ひかるは、立ち上がつて夕子に椅子を譲つた。

「じゃ、おじさま、帰ります。何かあつたらすぐ知らせて下さいね」

「ああ、ありがとう。気を付けてお帰り」

宇門と夕子は、ひかるを見送った。

「いいのかね？ 夕子君。君も今日いろんな事があつて疲れただろう」

「いいえ。ひかるさんつて、本当にいい子ですね。私、いっぱい教えられました。もうこんなおぼさんになつてるのに、私つたら何一つわかつてなくて……」

「君は、充分若いさ。それにここで起きたことは、誰にもわからないことだよ。わからなくて当たり前だろう」

「いいえ。私はいつも自分の事ばかりで、自分を中心にしか考えていませんでした。それを大介さんに教えてもらいました。だから少しでもお返ししたいんです」

夕子は、ベッドの横の椅子に座つて大介の顔を眺めた。

「夕子君……」

う……う……

大介が苦しそうに顔を歪めた。

「大介！ 大丈夫か？」

う……はあはあ……息づかいが荒くなり、左手を動かした。そつと、ゆつくりとその左手は、ぴくりとも動かない右腕へと移動していった。

右腕の存在を確かめるかの様に左手を動かし、また意識が遠のいて行つた様だつた。

「大介……」

宇門は大介の顔を見て、そうつぶやいた。

「先生？……」

夕子は、意味がわからなかった。

しばらくして、また大介が苦しそうに唸りながら、左腕を動かしてきた。

「大丈夫だ。腕はちゃんとあるぞ」

と、宇門は大介の耳元でささやいた。

大介は、ほつとしたような顔をしてまた眠りに落ちた様だつた。

(ふう……)

ため息をつきながら、宇門は横の一人掛けソファに沈み込んだ。そして目頭を押さえ込んだ。

「先生……」

「……」

「夕子君……今日この研究所で起きたことは、一切口外しないでもらいたい。いいね」

「え・ええ……」

「……」

「大介は、自分の腕を探してるんだよ。きつと……うちに切断される夢を見てるんだろう」

「え？」

「今日、大介と言いつ争っていたことは、君も知ってるだろう？」

「わしは、大介にその腕を切る！ と脅したんだよ」

「……」

「だから、その言葉が頭から離れないんだろう……」

「君もわかつただろう……この地球の平和を守っているのは、他でもない大介なんだ」

「腕を切断してしまえば、誰がこの地球を守るんだ？ 国防軍なんて、ごらんの通り全く当てにはならん。それを大介はわかつているから切断を拒否してるんだ。当然命と引き替えにだ」

夕子は、口に手を当てて目を見開いていた。

「こんな戦い方をしていたら、近い将来大介は……」

「彼は、必死で耐えてるんだ。すべてを背負って……」

「そんな大介に……わしは、切断と言ふ言葉を浴びせかけたのだ」

夕子は、目を見開きながら涙を浮かべていた。

「もうわかつているかと思うが、わしたちは本当の親子じゃない。だが、誰にも負けない親子だと、わしは自負していたんだ」

「ふふふ……おかしいだろ。息子を脅す父親なんかいるものかね……」

「先生……」

夕子は、泣いていた。

宇門も額を手で突つ張つて顔を隠し、涙を流していた。

しばらくの沈黙の後、夕子が口を開いた。

「先生……何もかも完璧な親子って、いないと思います。お互い間違いながらも絆を深めて行くとしようこともあるのではないのでしょうか？……あつ……ごめんさい。生意気言つて……」

宇門は、顔を上げた。

「いや……かまわんよ……」

「それに……大介さんは、そんなこと思つてないと思います」

「大介さんは……先生を一番大事に思つてるはずですよ……いえ絶対そうです」

「そうでなかつたら、全部背負うなんて事、出来るはずがないもの……」

「……ありがとう……」

宇門は、少し救われた気がした。

「先生、しばらくお休みなつて下さい。大介さんが目覚めたとき、先生が疲れた顔をしていたら、また気にしますよ」

夕子は、宇門に優しく微笑んだ。

「ああ……そうだな……そうしよう……何かあったら必ず呼んで下さい。そこにインターホンがあるからね」

「わかりました」

そう言つて宇門は、ソファから立ち上がり、部屋のドアを開け、

「じゃ、頼みます」

と言つてドアを閉めて去つていった。

夕子は、大介の顔を眺めていた。

発熱の所為で、かなりの汗をかいていた。タオルで拭いてやつたり、冷たいおしぼりを頭に乘せてやると、ふっと柔らかな顔になつてまた深い眠りに落ちていく様だつた。

しばらくすると、また苦しみ出した。夢を見ているのだろうか？

左腕がまた空を切るように彷徨つていた。

夕子は、大丈夫……大丈夫と言つて、右手の指を優しくさすつてやつた。右腕の感触が伝わりるとその存在がわかつて安心するのか、また深い眠りに落ちていった。

何度となく苦しもうなり声をあげ、顔を左右に振つた。夕子は、思わず大介を抱きしめた。そして

優しく大丈夫……大丈夫とささやきかけた。そのとき……

大介は、ほんの小さな声で、母上……とつぶやいた。夕子は、少しびつくりした。だが、それが大介の本当の心なのだろうと思つた。思わず愛おしくなつた。涙が溢れてきた……今だけは、心を解放してやりたかつた。大介が安心して眠れるように夕子は、ずつとそうやつて大丈夫……大丈夫とささやき続けた。

朝、心地よい眠りから大介は目覚めた。まるで母に抱かれて眠つていたような幸せな気分だつた。

少しづつ周りを見渡すと、すぐ側に夕子が座つたまま、顔を大介のすぐ側に近づけて眠つていた。しかも自分の右手をしっかりと握りしめているのだ。びつくりして起きあがろうとして、体に激痛が走り、唸つた。

夕子はその声に目覚め、

「ごめんなさい。少し眠つてしまつたようね」

大介は、ただ驚いていた。

「……す・みません……ご迷惑を……かけてしまったようで……」とぎれるような小さな声で、大介は詫言ながら、また体を起こそうとして唸つた。

「だめ！ まだ動いてはいけないわ。あなたは、当分絶対安静なんだから」

そう言つて立ち上がり、サイドテーブルから、水差しをとつた。

「熱がいつぱい出たから、のどが渴いたでしょ？」
はい。と言つて水差しを、大介の口に入れてやつた。

ごくごくと勢いよく水を飲むと、すかさず、夕子は
大介の口元をタオルで拭いた。

「す・みません……」

大介はどうして夕子がここにいるのか理解できなかった。

「……あの……父は……」

「今、休んでもらつてるわ。少し疲れているようだったから……」

「……そうですか……みんなに迷惑をかけてしまつて……」

大介はすまなさそうな顔をした。

「お互い様だわ。誰でも羽を休める場所が必要でしょう？」

（夕子さん？……）

大介はびっくりした。夕子が自分を真つ直ぐに見て普通にしゃべっているのだ。

その視線が辛かった。だからなるべく目をあわさないようにしていた。

「……あ・あの……」

「え？ あつ……少し体勢を変えた方がいいわね。ちよつと待つて……」

そう言つて、夕子は、ベッドのリモコンを操作し、頭を少し上げてやつた。

大介は体勢が少し変わつて楽になつた。

「……すみませ？」

大介が言おうとすると、夕子が大介の口に、シツ！と指をあてた。

「けが人は、黙つてなさい……ね！」

と言つて、くすつと笑つた。

大介は呆氣にとられていた。

「……」

夕子は、ベッドの縁に頬杖をつき、ずーつと大介の顔を眺めていた。

大介は、視線を逸らすために横を向いていた。

「……あの……夕子さん……」

横を向いたまま、大介は話しかけた。

「ん？ なに？ どこか痛い？ 腕をさすりましようか？」

「いえ……」

「……夕子さん……お世話になってしまつて……だけ
ど……もう大丈夫……どうぞ父のところへ……僕は、
もう大丈夫ですから……」

大介は夕子の顔を直視できず、横を向いたまま言葉
を選びながらそう言つた。

「何が大丈夫なの？ あなたは動いてはいけないのよ」
夕子は、強く言い放つた。

「……もう大丈夫です。……動けません……」

そう言つて、苦痛に顔を歪めながら、上体を起こそ
うとした。

「だめ！」

夕子は、大介を押しえつけた。

「ホントにもう……先生でなくても殴りたくなるわ
よ」

「……では大人しくしてます……お願いです……」

大介は夕子の顔を見ずに懇願した。

「私が側に居るのが、そんなにいや？」

「いえ！ そうじゃない……あなたに……申し訳なく
て……」

「だつたら気にする必要はないのよ。私は今あなたのお
世話をするためにここに居るのだから……」

「……夕子さん……あなたには、本当にいやな思ひを
させてしまつて……僕の所為で……」

「何をいつてるの？」

「……せつかく父に会いに来たのに……僕が居た所為
で驚かせてしまつて……」

「そうね……先生にこんな大きな息子がいたなんて、
シヨックだつたわ。最初はね……」

「……父のことを……」

「そう……昔からずーつと先生の事が好きだつた
わ……」

「ずーつと先生のことを思っていたら、こんなおば
ちゃんになつちやつたわ」

夕子は、遠い目で大介に語つた。

「……僕の所為なんです。何もかも……僕が居なかつ
たら、こんな事にはならなかつたのに……僕の所為
で……」

「がばつ！」

夕子は思わず大介を抱きしめた。

(え?)

「そんなこと言うもんじゃないわ……あなたは一人
じゃないのよ……あなたを大事に思っている人は、
いつばい居るのよ……」

大介を抱きしめながら、夕子は涙を流した。

「もつと生きることにどん欲にならなくちゃだめ。諦
めちゃだめ……」

「もつと人に寄りかかって生きなきゃ……それが、人つてものでしょう?」

(夕子さん……)

大介は、抱きしめられながら、眠っていた時の感覚を思い出した。夕子の柔らかさ、暖かさを肌で感じて、もしかして?……と思いつつ、されるがままその暖かさに浸っていた。

カチッ

宇門がドアを開けると、夕子が大介を抱きしめていた。そして大介は小さな子供の様な顔をして目を閉じていた。

宇門はびつくりしたが、そつとドアを閉めた。そしてドアの外で、ありがとう……とつぶやいた。

しばらく夕子は、大介を抱きしめていた。小さい子をあやすように……

やがて大介はその心地よさに安堵し、また眠りに落ちていった……その顔は穏やかな寝顔だった。

夕子は、大介が寝入ったのを確認して、しばらく外の空気を吸いに行こうと席を立った。

そつとドアを開けて外に出ると、そこには宇門が立っていた。

「先!？」

「シッ!」宇門は口に指を立てそして微笑んだ。

ピピピイ

小鳥のさえずる声が聞こえた。

屋上で、夕子は、うーんと背伸びをした。

宇門は、そんな夕子を眺めて微笑んでいた。

「なんだかすごくすつきりしちやつた」

「夕子君、世話をかけたね。大介も君に救われた……」

「いいえ……私の方こそ、あの子に救われたわ……」

「あの子?」

宇門は、夕子のその言葉に少しびつくりした。

「そう……私にとってはただの子供よ。ふふふつ」

「あんなでかい子供もいないと思うが……ははは!」

「ふふふ……ばらしちやおうかな?」

「あの子……眠っている間、ずつとうなされてたの。

私には、助けて! 助けて! って、言ってるように聞こえて……思わず抱きしめてしまったの。大丈夫……大丈夫って言いながら」

「そしたら……小さな声で……母上って、そう言ったのよ」

「え?」

宇門は、あまりの意外さに驚きの声をあげた。

「私、母親になった気分だったわ。まだ子供も居ないのね。ふふふつ」

「あの子の心を解放してやりたかったの……私に出来ることはそれだけ……」

「いや……夕子君。君にしか出来ない事だよ。大介はきつとつかの間の幸せを感じた事だろう……ありがとう」

宇門は、心底夕子に感謝した。

「先生……私、今日帰ります。お世話になりました」

夕子は、宇門に頭を下げた。

「大介が寂しがるな……」

「先生は、どうなんですか？」

「あはは！ わしも君の手料理が食べられないと思うと残念だよ」

「まあ先生、私は家政婦さんじゃありませんよ！ ふふつ」

「そうだな。これからは加藤君の為に頑張っておくれ」

「先生！ ご存じだったんですか？」

「ああ……平井君に聞いていたよ」

「知っていて……ひどいです。先生！」

「すまなかったね。いやわしも懐かしくてつい……な」

「先生をこれ以上待ってたら、私おばあちゃんになっちゃうわ。だから、これからは彼と一緒に歩いていこうと思います」

「幸せにね」

と、宇門は、これ以上ないと言う満面の笑みを讃えながら、彼女の幸せを願った。

「あつそうだ、あの子のご飯……。先生、付き添ってもらえますか？ 目を離すとすぐに無茶するんだから！」

「ああいいよ。出来ればわしの飯もお願いしたいがね」

「やつぱり……家政婦さんと思ってる様ですね。ふふ」

二人は笑いながら屋上を後にした。

宇門が、部屋に入ると、大介は静かに眠っていた。昨日の苦しみが嘘の様に穏やかな顔をしていた。

またすぐに辛い戦いがやってくる……だけど、今だけはゆつくり休ませてやりたいと宇門は願った。

窓から見える景色は、さわやかな秋の気配を映し出していた。

「……父さん？……」

「ああ目が覚めたかね？ 具合はどうだ？」

「宇門は、そう言つて大介の側に座つた。」

「ええ……もう大丈夫です。心配かけました……」

「当分は、安静にしてろ。いいな」

「……はい……」

大介は、そう言つて目を伏せた。

「……父さん……僕は……」

「もうなにもよけいな事は考えるな！ いいか……」

宇門は、大介の左手を握り諭すように話した。

コンコン

よいしょ。と言いながら夕子が入つてきた。

「おお、夕子君。すまなかつたね」

そう言つて、宇門は、荷物を持つてやつた。

大介は、先ほどの事が恥ずかしかつたのか、少し視線をはずした。

線をはずした。

「お待たせしました。研究所のキッチンつて使いづらくつて……大したもの作れなかつたんですけど……」

そう言つて、宇門にお弁当を渡した。

そして、大介のサイドテーブルに鍋を一つ置いた。

「ん？ それは？」

大介は不思議そうに聞いた。

「大介君は、怪我人なんだから消化のいい物と思つ

て、雑炊作つてきたの」

「ちよつと待つてね」

そう言いながら、夕子はベッドのリモコンスイッチを押して、大介の背中をあげてやつた。

「これで食べられるでしょ」

大介は呆氣にとられていた。

宇門はソファに座り、お弁当を開けて、おおこれは

美味しそうだ。と言いながら食べはじめた。

さてと。と言いながら、夕子は、鍋から小さい器に

雑炊を入れて、大介の横に座つた。

夕子が、器からスプーンで雑炊をすくい……

「はい、あーんして」

宇門は、ブツ、と吹き出した。

「あつあの……夕子さん、自分で食べられますから」

「怪我人は、黙つてなさいつて言つたでしょ。はい、あーん」

「あの……左手は使えます……だから……グッ」

夕子は、口に無理矢理放りこんだ。

「大介！ 諦める……ぐふふ」

「父さん！ グッ」

また、無理矢理食べさせる。

「夕子さん、もういいです。お願いですから……」

「え？ 不味かつたかしら？」

「いいえ。美味しいです。でも……」

「じゃもつと食べて。しつかり体力付けなきゃ。はい、あーん」

「うん。美味しいねえ。夕子君の手料理は」

そう言いながら、宇門は笑っていた。

結局、大介は笑われながらも食べさせてもらう羽目になってしまった。

「ごちそうさま。さてと、わしは仕事に戻るから、夕子君、後よろしくお願いするよ」

と立ち上がり、クツクツクツと笑いながら出ていった。

「父さん！ グッ」

宇門に笑われて真つ赤になつてゐる大介の口に、また夕子が無理矢理突っ込んだ。

宇門は、観測室に向かう廊下で、大爆笑してしまつた。

「あははは！ 初めてみたぞ。大介のあんな顔……あははは！」

その声は、観測室にも届いていた。

「あれ？ 所長の笑い声……？」

と林所員が、びつくりしていた。

「きつと、大介君が元気になつて安心したんだろ」と、佐伯所員がよかつた。と言う顔で答えた。

「美味しかった？」

夕子は、片づけをしながら大介に問いかけた。

「……ええ……ありがとうございました」

大介は、左手で、頭を掻き、照れ笑いをしていた。

夕子は、大介の横に座り、

「私、今日帰るわ」

「え？ いいんですか？……父のこと……」

夕子は、しばらく沈黙してから、

「……ふふふつ、私、結婚するわ……」

「え？」

「ずーっとプロポーズされてたの……兄の同僚の方に……」

「でも、私ずーつと迷つて……だつて初恋だったのよ。先生のこと……先生は忙しくてずつと会つてなかつたけど、でも思い切れなくて……」

「兄に、いい加減にしろ！ って怒られちゃつて……先生は、お前なんか相手にしないぞ！ って、そう言われてムカツて来て、じゃあ会いに行くわ。つて飛び出して来ちゃつたの」

大介は、驚きながらも静かに聞いていた。

「ここに来てよくわかつた……」

「私は、いつも自分の事ばかり……過去だけを見て生

きて来たわ……」

「あなたには、人に寄りかかれて言ったけど、私は反対ね……誰かにもたれかかってないと生きていけないんだわ。もつと自立しなきゃ」

「あなたにそれを教えてもらった……ふふふ……こんなお婆さんになつてるのに今頃わかるなんて、情けないわね……」

「……夕子さん……」

「それに、私、先生を待つてたらお婆あちゃんになっちゃうもの……子供産めなくなっちゃう」

「私つて、母性本能があつたのね……あなたのお世話して、よくわかつた」

「全く……図体ばかりでかくて、号情つ張りで、大きな子供なんだから……あなたつて子は……ふふふ」

「でも私には一番心をくれた人……ありがとう」

そう言つて夕子は、大介の左手を自分の頬にあて目を閉じた。

(夕子さん……)

大介は夕子の言葉が嬉しかった。

「さてと！ 体拭いたげるわね」

「え？ いいです！ 自分で出来ます」

「怪我人は黙つてなさい」

そう言つて夕子は、外に出てバケツにお湯を入れて

持つてきた。

熱いおしぼりを作ると大介の顔を拭こうとした。

「あつあの……自分で出来ます。出来ますから……」

「もーこの子は！ 黙つてなさいつて言つてるでしよ！」

夕子に怒られて渋々されるがままになっていた。

そこへ……

「ちーつす！」

と言いながら甲児がドアを開けた。

目に飛び込んできたのは、大介がきれいな女性に覆い被されて抱きついている姿だった。

「え？」と、甲児。

「あつ！」と、大介。

「あら？」と、夕子。

ドアを開けたまま甲児は固まつてしまった。その間、数秒……

「失礼！」

ドアを開けた手で、そのまま閉めて走り去つた。

「お・おい！ 甲児君！ おい！ うっ……」

甲児を呼び止めようと上体を起こした大介は、傷が痛み、唸つた。

「うふふ、誤解されてしまったようねえ……彼が甲児君ね」

「全く……当分彼に嫌み言われそうだよ……」
ふうやれやれと言う顔で大介はため息をついた。

身支度を整えた夕子は、大介に向かって、

「じゃ、帰るわ……」

「夕子さん……ありがとうございます。……もう会えないかもしれないけど、あなたには感謝してます」
がはっ！夕子は、大介を抱きしめた。

「会えないなんて言わないで……生きてればまた会えるわ」

「決して命を粗末にしないで……生きることを考えるのよ。私は遠くからあなたの無事を祈ってるから……」

そのまましばらく夕子は、大介を抱きしめていた。

(……ありがとう……)

大介は、心から感謝し、初めて自分も夕子を抱きしめた。

そして夕子は、じゃ……と言いながら部屋を後にした。

甲児は、ぼかんと口を開けたまま所長室に入ってしまった。

「ああ甲児君、どうしたんだね？」

「え？ あつ？ いえ……びっくりしちゃうって……」

「何かあったのかね？」

宇門は、きよんとした顔つきで聞いた。

「いえ、大介さんが……きれいなお姉さんと、なんかいちゃいちゃ……」

さては見られたな……

「ふふふ……甲児君、すまんがからかわないでやってくれよ。でないと大介が拗ねるから……あははは！」

宇門は、大声で笑った。

「はあ……？」

甲児は宇門が笑っている理由がよくわからなかった。

コンコン

はい。と言うと夕子が入ってきた。

「あら？ 甲児君ね。先ほどは誤解されちゃった見たいね……ふふふ」

「え？ 誤解？」

甲児は、きれいな人が話かけて来るので、少々舞い上がった。

「変な誤解しないでね。あの子の体を拭いていただけだから。でないと、ひかるさんに怒られちゃうわ」

「えー？ なんだ。そうだったのかー！……え？（あのこ？）」

何もかもが甲児には驚きで、訳が分からなかった。

夕子は、真つ直ぐ宇門を見て、

「先生、ありがとうございます。帰ります」

「うむ。世話になったね。ああそうだ。甲児君。すまんが夕子君を駅まで送ってくれないかな？」

「ええ、いいですよー！ こんなきれいなお姉さんなら、何処までだつて付いて行きますよー」

あはは！ 一同声をあげて笑つた。

さあ下まで送つていこう。そう言つて宇門は、一緒に玄関まで下りていった。

玄関まで来ると、ひかるがジープでやつてきた。

「おじさま、大介さんの具合どうですか？」

ひかるは心配そうに聞いた。

「あはは！ ぴんぴんしとるよ」

と、ひかるに向かつて微笑んだ。

よかつた。とため息をつき、夕子が荷物を持って立つているのが目についた。

「夕子さん。帰るんですか？」

「ええ、ひかるさん。本当にあなたには感謝してるわ。

ありがとう」

「おまたせー！」

と言つて、甲児がジープを回してきた。

「甲児君が送つていくの？」

「ああ。美女の為ならどこまでもーつてね」

と甲児は、いつも調子がいい。

「じゃ、私もついていくわ。甲児君一人じゃ心配よ」

そう言つてひかるは、ジープの後部座席に乗り込んだ。

「なんだよー！」

「なによ。美女が二人もいて幸せでしょ！？」

「えー？ そりゃそうだけどぎー」

あはは！ 一同みんな大笑いした。

「じゃ、先生……」

「うむ。元気でな……平井君と加藤君によろしく伝えてくれたまえ」

そう言つて宇門は、夕子に微笑みかけた。

ブーンブーンとけたたましい音を立てて、ジープは走り去つていった。

カチャ

ドアを開けると、大介はじつと左手を眺めていた。

「夕子君は、帰つたよ……」

宇門が入つてきたので、大介は少し頬を赤らめてはにかんだ。

「ええ……」

「父さんはよかったですか？」

大介は聞いてみた。

「なにが？ 彼女は、加藤君と結婚するんだよ？」

「えー？ 父さん知ってたんですか？」

「ああ、もちろんだとも。平井君に電話で聞いていたよ」

大介は絶句した。

「……僕だけ蚊帳の外だったんですか？……僕は、てっきり父さんもその気なんだと……」

「ああ……すまなかったね。先に話しておくつもりだったんだが……余計な気を使わせてしまったね」

そう言つて宇門は窓辺に立ち、遠くの景色を眺めていた。

「ちよつと勿体なかった……と思つてるんじゃないんですか？」

「ああ？……そうだな。彼女の料理は絶品だ」

「いやそうじゃなくて……大体もう若くないのに……あんな若い人……勿体ない……」

大介は宇門をからかうように言つた。

「何をいつとる。わしはまだ若いぞ！ お前こそ寂しいんじゃないのか？」

「え？ あ・あれは夕子さんが無理矢理……」

「ふふふ……それだけかね？」

「え？」

「わしは、お前がマザコンだなんて知らなかったよ……はははは！」

宇門にからかわれて、大介は耳まで真っ赤になり、上掛けをすつぽりとかぶつてしまった。

外の景色は今日も平和であることを告げていた……

おまけ(笑)……

宇門「おい大介!」

大介「なんですか? 父さん」

宇門「わしも見よう見まねで雑炊を作ったぞ!」

大介「え? 食べられるんですか? それ……」

宇門「何をいつとる。絶品じゃぞ!」

宇門「ほら、大介! あーん」

大介「父さん! 止めてください……それ……」

宇門「うるさい! 黙って食べろ。ほら、あーん」

大介「いい加減に……ぐっ」

宇門「どうだ。おいしいだろ」

大介「お願いです父さん。夕子さんを呼び戻してく

ださい」

宇門「わしが母親代わりだ!」

大介「ちがう……これ食べ物じゃない……ううう

(涙)

宇門「よしよし大介。そんなに泣くな。父さんがつ

いてるぞ。もつと食べろ」

大介「ぐっ……父さん……僕を殺す気ですか!

わーん(大泣き)」

もう一個おまけ……

—宇門邸—

宇門と大介は、暖炉の前でとりとめのない会話を楽しんでいた。

ピンポン

宇門邸の玄関のチャイムが鳴った。

宇門が応対にでると、

「宅急便です」

と、若い男の人が、どでかい段ボール箱を持ってやってきた。

あまりの大きさに一瞬ひるんだ宇門だが、送り主を確認すると、夕子の兄、平井君だった。

手紙が張り付けてあったので、どれどれと言いながら手紙を開いた。

———

拝啓、宇門先生。

先日は、妹が大変お世話になりました。ありがとうございますとございます。

そちらから帰ってきた夕子は、人が変わったように明るくなり、加藤君と結婚すると言いました。

夕子の心境の変化は何だったんだろうと聞いてみると……

そちらで、かわいい男の子に会った。と言って、自分は母親代わりをしてきたと言うのです。

あまりにその子がかわいかったので、自分も早く子供が欲しいと思いい結婚を決心したと言うのです。

やつとこれで、夕子も落ち着いて新しい人生を歩みはじめることが出来ます。

先生には大変感謝しております。

つきましては、そのかわいいお子さんにお礼のつもりでこの品をお送りしますので、お渡し下さい。

夕子の代わりにかわいがってやってください。

ありがとうございます。

敬具

(え？ もしかして、大介にか?)

宇門は、どでかい段ボール箱を開けた。

「あつ!」

「おい! 大介、ドアを開けてくれ……」

「何ですか?」と言いながらドアを開けると……

「うっ!」

と言いながら大介は後ずさりした。

ドアの前に、でっかいティディベアのぬいぐるみが

立っていたのだ。

「と・父さん! それ、どうしたんですか?」

大介は顔を引きつらせていた。

宇門は、ティディベアを抱きかかえたままリビングに入った。

「平井君から、お前にだつてさ」

「い? な・なんで……?」

大介は、意味が分からず宇門と距離をとりながら後ずさりをする。

「そりやお前が、夕子君がいなくて寂しがってるんじゃないかって、平井君の思いやりさ」

宇門は、無理矢理大介にティディベアを押しつけた。

「……?・?……」

「よかつたなあ、大介。これで母親がいなくても寂しくないぞ! あははは!」

宇門は、お腹を抱えて大笑いした。

「……」

大介は、ティディベアを抱えたまま座り込み、しばらく放心状態だった……

—あとがき—

初めまして、Reeと言います。

つたないフィクションを読んでいただき、ありがとうございます。

このフィクションには、本編と内容が違う部分がいくつかあります。あくまでも二次創作と言うことをご了承頂きたいと思います。

フィクションのテーマとしては、ネクラだと言われる大介のイメージを払拭しなかったのと、親子愛を書きたかったのですが、当初の予定になかったのに最終的には大介をマザコンにしてしまった事に少々苦笑しています。

物を書くと言う行為は、今回が初めてで、表現力や語学力が乏しいので読みづらい点が多々あったかと思えます。また関西人なので、どうしても笑いの部分を入れなくては気が済まない性格が仇となり、最終的にはコメディ化してしまいましたが、楽しんでいただけたら幸いです。

さて、私はグレンダイザーをリアルタイムで観ていました。当時のアニメは殆ど見ていたのですが、特に好きになったのは、このグレンダイザーでした。が、時代はまだアニメオタクを口にするほど世間の理解

はありませんでしたので、胸に秘めたまま現在に至っておりました。

インターネットの世界になって、アニメオタクも目の見る時代がやってきましたが、好きなアニメは？と聞かれると、必ずガッチャマンと答えていました。私の中では、グレンダイザーは特別な存在なので、簡単に口にする事が出来なかつたのです。誰にも言わず、ずーつと心の中で大介を暖めてきました。

最近、ネットで本編のグレンダイザーを見ることが出来るようになって、一気にヒートアップ。寝ても覚めてもと、何をしていても大介への想いが溢れてきました。そして、偶然「Frontier Line」サイト様に出会ったのです。衝撃的でした。コンテンツを拝見したり、BBSでコメントを頂いたりしていると、ああ私が大介の事、語つてもいいんだ……と素直に感激しました。そしてフィクションを書きたい。と思うまでにそれほど時間はかかりませんでした。書き始めるともう止まりません。完璧に自分の世界に入り込んでしまい、一気に書き上げました。ただ、人に読んでもらおうなんて、その時点では思っていませんでした。でも出来上がってしまうと、誰かに自分の思いを伝えたいと思ってしまう、裕川様に目を通して頂いたので。

初めて書いた物なので、誤字脱字の嵐……表現力の問題、フォーマットのお約束事など全然知りません。それを丁寧に教えていただきました。

今回、こうして私のフィクションが皆様の目に触れていただける事になったのも、裕川様のひとかたならぬお力添えがあったからこそだと心より感謝しています。

昨今、ネットが問題でいろんな事件が起こったりしていますが、こうしてネットでお知り合いになるたびに、人と人とのふれあい・温かさを感じています。きつと、ただ一人地球に到着した大介も同じ想いを感じたのではと思っています。

私もその思いを忘れずに、これからも精進していきたいと思います。

ありがとうございます。

Ree